

新・ムゲン団（カロス）

産業革命

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ムゲン団を見てずっと思っていた。

肉体年齢変わらないユウリちゃんセルナちゃん

で、出来ないかなど。

処女作ですので、期待はしないでください。

捏造・妄想祭りですので機雷（嫌い）な方はお戻りください。

X・Yの続編まだかな…。

現在活動報告にて、今作の執筆者を募集しております。書いてくださる方をお待ちしております。

目次

世界観設定	1
人物紹介	8
閑話：25年間の記録（1）	13
本編	
新・ムゲン団（カロス）	20
第二話	30
第三話	40
第四話	52
第五話	63
第六話	75
第七話	86
第八話	97
第九話	109
第十話	120
第十一話	133
第十二話	144

世界観設定

〈世界設定〉

〈国家〉

ポケモンの世界（と言うより今作）では国家という物は過去の遺物と化し、惑星全体を一つの政府が治め、その補助として地方行政が存在する連邦制（現実で言う地球連邦とも言うべき物）となっている。

連邦政府の本部はイツシユ地方のヒウンシティ（現実のニューヨーク）に存在するが、実際の行政は地方の各都市（現実での各国家の首都、又はそれに準ずる大都市）の行政機関で行われている。

メタい話をする、と、国連が国家の連合では無く地方の連合になった感じ。政治的には現実と余り違いは無い。

〈地方区分〉

連邦政府によって分けられた行政規格の単位で、伝統文化や自然環境の調和を目的として制定された。

その規定には虫、草タイプの生活圏である森林地帯、氷タイプの生活圏である降雪地

帯、水タイプの生活圏である河川湖畔等の様々なタイプの生活圏の土地を一定以上確保する事や生活文化が類似している文化圏である事等で区分けされている。

〈カロス地方〉

惑星の北半球に位置する地方。北にはガラル地方、海を隔てた西側にはイツシュ地方が存在する。

料理や衣服、建築や絵画等の食や芸術の文化で名を馳せる地方であり、ポケモンバトルにおける革命の一つであるメガシンカが初めて観測された場所でもある。

現実世界での北フランスに位置し、現実のフランス同様に果実酒の製造（ポケモン的には木の実酒）や穀物等の農業も盛んである。特に木の実酒は古くからの歴史があり、観光地としても有名なシャトーやワイナリーが数多く存在する。

〈ミアレシテイ〉

カロス地方の中心都市。市街地の中央には25年前はプリズムタワーだった塔を改装したポケモンジム複合施設『ミアレタワー』が新しく建てられた。

嘗ての古代王政時代からの都市を元に現在に至るまで拡張に拡張を重ねた結果、世界屈指の大都市にまで発展した。

そんなミアレシテイの地下には古の地下迷宮があり、探索に訪れて帰らぬ者になってしまった探索者が今も彷徨っている…という怪談があったりなかったり。

〈言語〉

非常に不思議な事に全世界で共通の言語が存在する。無論、多少の方言的な言葉や筆記体は存在するものの、(余程訛りや筆記体が酷くない限り)概ね意思疎通で困ることは無い。

何故世界で言語が共通なのかにはついては謎だが、とある言語学者曰く「世界各地の遺跡に同じ様な形の文字(アンノーン文字等々)が存在する事から、古代には統一言語を持った文字通りの世界文明があり、現在の文明はその世界文明を元に発展したから。」らしい。

〈信仰・思想〉

連邦政府が定めた憲法には『信仰・思想の自由』が保証されている(例えその信仰・思想が過激や破滅的であっても、一応は保証される)。

然し、公共の福祉や生態系・社会活動に甚大な被害を齎すものは取締、規制の対象となる。例で言えば、過激な海洋の環境保護団体や溶岩の人類至上主義団体、ポケモンの開放を謳った電離気体な宗教団体等々。考えたり信じたりしているだけならいいのだが、実際に1地方を危機に陥れる等の目標を達成し欠けてしまう程の行動力と組織力を持っている為質が悪い。所謂、『行動力のある異常者』のやらかしである。

〈ムゲン団〉

『あるべき世界を目指して、ムゲンの可能性を追い求める』を行動指針に、慈善事業やエネルギー開発を行っていている団体。

現代表は炎タイプの四天王を務める女性だが、元々はある人物が設立した団体であり、紆余曲折を経て今の状態に落ち着いた。

表向きは孤児や野良ポケモンの保護をしていたり次世代のエネルギー開発をしているが、噂によると真のムゲン団と言うものが存在しており、そのムゲン団は『世界の改變』を目論んでいるらしい。

〈ポケモン信仰〉

古代より続く特に強大な力を持つ『ポケモン』に対する信仰の事。古くは『創造神』と呼ばれるポケモンを崇めていたり、アブソルを『死神』と恐れたりと信仰の時代や形態は様々。

特にカントーやジョウト地方等では『不死鳥』に対する信仰が厚く、他にもニヤースを商売繁盛の証としているなど特有の文化が根付いている。

〈大帝〉

カロス地方に古くから伝わる物語に登場する人物。彼は戦乱が絶えなかつた古代カロス地方を統一し、人々とポケモンに平和と秩序を齎したと語られている伝説の王である。

その功績から『大帝』と証されたらしいが、名前は何故か遺されていない。

そんな偉大な人物であったが、その『大帝』の最期は悲劇的なものであったらしく、とある古文書では『最期は『怪物』と化した』と記されている。

〈カロス地方のポケモン伝説〉

世界各地に存在するポケモン伝説の一つ。カロスでは『聖獣』と『魔鳥』の2体に纏る伝説が存在する。

この伝説については他の地方の伝説に比べ資料や言い伝えが少なく、その全貌については明らかになっていない。

だがとある言い伝えによると、2体のポケモンはそれぞれ『生命の苗木』と『破壊の繭』と呼ばれる姿になり、復活の時を待っているとか…。

〈ポケモンリーグ〉

ポケモンリーグは『ポケモンと人間の共存共栄』を指標として連邦政府によって発足した組織であり、各地方ごとに存在している。

下位組織にはポケモンレンジャーや地方警察があるなど、普段の治安維持の役目も担っている。

地方毎で規模に差があるが一年に一度、次世代の人材とポケモンとの交流を目的にチャンピオンリーグが開催され、勝ち残った者にはリーグチャンピオンの称号と名誉が

待っている。

〈国際警察〉

連邦政府直属の司法機関であり、ロケット団等の地方の枠組みを超えた事件や組織を捜査している。又最近では時空の歪み等の異常事態にも対処している他、犯罪組織予備群の調査も進めている。

国際警察の本部はキナンシティ（現実のリヨン）に位置しているが、近々カロスリーグの要請によって捜査員が派遣されると噂されている。

〈ポケモン〉

正式名称は『ポケットモンスター』、通称『ポケモン』と呼ばれる摩訶不思議な生物達。炎を出したり水を吐いたり植物を操ったりと言った事が出来、人間との共存の過程で無くてはならない存在となった。

そんなポケモン達には『タイプ』という区分が存在するが、電気タイプならば発電器官の有無、炎タイプならば可燃ガスの生成器官や発熱器官の有無等で分けられている。然し自身のタイプ以外の技を発動出来る等と疑問は尽きない（例で言えば、発電器官が無いのに電気技が使える、可燃ガスの生成器官が無いのに火炎を吐ける…等）。

〈メガシンカ〉

ポケモンがトレーナーと共鳴する事で生じる形態変化現象の事。歴史上カロス地方

で初めて観測されたとなっており、ポケモンが受けたダメージをトレーナーも受ける等、その現象は現代でも謎が多い。

とあるメガシンカ研究で著名な『博士』曰く「ポケモンとトレーナーとの絆によって発生する進化の可能性の一つ」らしく、形態変化前の身体能力と比べると形態変化後はそのポケモンの種族個性に応じて激的に増加しているらしい（例えばサーナイトの場合、メガシンカ後はメガシンカ前と比べ念動力等が飛躍的に上昇している）。

そんなメガシンカにはキーストーンとポケモンに応じたメガストーンが必要であり、メガストーンは対応したポケモンの波長と共鳴しあう事が判明している。

だが極稀に、それ等の道具無しで変化する『絆変化』が確認されている。

〈超越者〉

ポケモン世界に存在する超能力者や霊能力者とは一線を画す能力・感覚を持つ人物の総称、所謂ポケモンの『加護』を得た人物の事。

そう呼ばれる人物の多くは伝説や神話に存在した『英雄』とされる人々であり、従えたポケモンに由来する能力・感覚を持っていたとされている。

実際、シンオウ地方の『見えざる神』を従えたトレーナーはある物事の反対事象が解るようになり、イッシュ地方の『真実の竜』と『理想の竜』を従えたトレーナーは他人の嘘や求めている事が解るようになったという。

人物紹介

～人物紹介～

〈少年〉

本作（X・Y）の主人公、容姿は父親の過去の姿に瓜二つ。

旅装束は父親のお下がりで、過去の少年の父親を知っている人はよく驚く。

X・Yの主人公とは異なり、カロス生まれ・カロス育ちの生粋のカロス人。

最初のポケモンは両親のポケモンの子供（最初に二匹選べる）、赤子からの付き合い。因みに名前は無い、何故なら主人公だから。

序に言えば、異なる世界線では性別が逆らしい。

遂にメガリングを手に入れ、序にルカリオまで付いてきた。

〈少女〉

漆黒の喪服の様な服を身に纏い黒いレースの目隠しをした少女、髪は銀に近い白髪の長髪。

ポケモンに対する愛情と知識は深く、少年に対して初めての野生ポケモンゲットのレクチャーや御三家の最後の一匹をくれたりする。

因みに、少年には「モーター」(カレープラントから命名)と名乗っている。そんな彼女の最近の趣味は、カロスの伝説や神話の研究らしいが…。

〈チャンピオン〉

少年の父親にして、カロスの英雄の一人であるチャンピオン。

チャンピオンとしての人気はお隣の地方であるガルル地方のチャンピオン並。

前作主人公の好敵手だったが、件の好敵手が行方不明となった後にカロス地方のチャンピオンとして就任。

就任以降十数年に渡り無敗を誇り、此処最近ではカロス市民から神聖視されつつある。

〈炎タイプの四天王〉

慈善団体「ムゲン団」の代表と炎タイプ四天王を務める女性。

嘗てはニユースキャスター等の兼業をしていたが、ムゲン団所属以降はキャスター業は休業。

最近はとあるエネルギーの研究に心血を注いでいる。

〈失踪した元チャンピオン〉

二十五年前にチャンピオンに就任し、「ムゲン団」を設立した少女。

カロスのみならず世界を救った英雄として、人々からの人気は高かった。

然し、十数年前に突然姿を眩ませて以降行方不明となっている。

現在では其の姿と名前を覚えている人物は少ないが、彼女を知る人によると『あの事件』以降髪を除く身体的成長を一切していない様に見えるらしい。

〈白髪の巨大な男性〉

人間としては異常な巨体を誇り、珍しいフラエツテを連れている男性。

何故かムゲン団の追跡を受けている様で、少年に意味深な発言をする謎が深い人物。

世界の破滅を予言し、其れを阻止しようとしているらしいが…？

映し身の洞窟にて少年の命を救い、其後に世界を救って欲しいと少年に頼んで姿を消した。

〈案内人〉

少年にミアレシティを案内した男性。

カロスでは知らぬトレーナーがいない程に有名な研究所に関わりがあった人物らしく、少年の父親であるチャンピオンとも親交がある。

ミアレシティに住居を構えているが、近所の住人の話ではある日を境に精神が不安定になっているらしい。

〈虫タイプのジムリーダー〉

ハクダンジムのジムリーダーを務める写真家の女性で、姉はミアレ出版社で編集長を

している。

少年の父親であるチャンピオンから挑戦の話は聞いていたが、父親譲りの少年の容姿と実力に驚愕した。

〈ミアレ出版の編集長〉

ハクダンジムのジムリーダーの姉であり、カロス地方の大手出版社であるミアレ出版の編集長を務める女性。

妹からの電話で少年に興味を持ち、丁度其時に噂の少年が職場を訪れた事で熱烈な歓迎をした。

其後、ミアレシティの案内を兼ねた御詫びとして少年をカフェに誘い、其処で少年を質問攻めにした。

〈トップクラスの女優兼トレーナー〉

ミアレシティのカフェで出会った、カロス地方一番の女優であり世界トップクラスのポケモントレーナーでもある女性。

少年の父親とは個人的且つ公的な親交もあり、少年は非常に驚いた。

相棒はサーナイトで、嘗ては獅子奮迅の活躍をしていたらしい。

カフェで出会った時に少年の才覚を感じ、少年にラルトス♀を託す（色違いの可能性有り）。

〈岩タイプジムリーダー〉

シヨウウジムリーダー兼登山家兼アスリートである男性。

此処十数年の間、変化しないポケモンリーグとバトルに諦観の思いを抱いていたが、少年との死力を尽くしたバトルから奮起する事に成功した。

ポケモンリーグの規約から全力のポケモンバトルが出来無い為、未来における少年との真剣勝負を約束した。

〈格闘タイプのジムリーダー〉

シヤラジムのジムリーダー兼ローラースケーター兼伝承者の女性。

ジム戦の際に少年に何か輝く才能を感じたので、マスタータワーに招待して試練を与えた。

少年にメガリングを渡す際、忘れもしない彼女の様な出来事に驚いて、これからの少年の旅に運命を感じた。

閑話：25年間の記録（1）

これは、とある『少女』が旅立ってから25年間に起きた事の記録を纏めた物である。

くとある新聞記事く

〇〇〇〇年R D月G R日発行

『新カロスチャンピオンが誕生!!』

昨日、カロスリーグ広報部より新チャンピオンが誕生したとの発表があった。これによりカロスチャンピオンであったカルネ氏のチャンピオン防衛記録はB L年で終止符が打たれることになり、長い間カロスのポケモントレーナーの頂点であった彼女が交代するという此の出来事は、まさに激動であった今年を象徴していると言えるだろう。

く中略く

肝心である次期カロスチャンピオンだが、カロスリーグ広報部の続報によると、なんと次期チャンピオンである人物はあのフレア団事変を食い止めた『カロスの英雄』の一

人である『少女』であるという。

又、明後日であるY E月F R日にはミアレシティの特設会場でカロスチャンピオン就任式典と『カロスの英雄』達へのカロス勲章^{エンブレム}エンブレムの本来の意味ではないし、何方かと言えば記章と訳した方が適切かと思ったが、私にはイマイチ理解できなかったのここでは勲章とすることに。カロス地方へ多大な貢献をした人物へ与えられる勲章で、あのカエンジシ氏や影薄女優氏も受勲している。あとここではエムブレムではなく、エンブレムである。どうでもいいことだが、同じ会社が元締めなのになぜゲームで呼び名を統一しないのか。授与式が催すとも発表されている。

この突然の発表にポケモンネット上では多くの人々が動揺を隠せなかったようだが、当事者であるカルネ氏は自身のP N Sポケモンネットワーキングサービスの略称。上で「チャンピオンでなくなっても、ポケモントレーナーと女優であり続ける」とコメントしており、新チャンピオンである『少女』に対して称賛と応援するコメントもしている。

く 中略 く

世間の反応としては、長年カロスチャンピオンであったカルネ氏を惜しむ声や『カロスの英雄』たる『少女』に対し祝福する声がある一方で、その実力を疑問視したり、新規挑戦者を取り入れたいというリーグの陰謀だという者もいたり、意見が分かれてい

る。

しかしながら、この激動の一年であった今年の最後がこのような明るい話題であることを、一記者である私としては大変嬉しく思うばかりである。

〜とあるゴシップ記事〜

△△△年GO月SL日発行

『新チャンピオン就任式典に現れた謎の男性!!新チャンピオンとの関係性は?』

カロスで今も話題沸騰中の人物と言えば、カロスチャンピオンとなったあの『少女』である。

世界を救った『カロスの英雄』であり、しかもあのような整った容姿をしていれば話題になるのも当然であると言える。

〜中略〜

そんな彼女だが、就任式での出来事が一時期話題になった事を読者の皆様は覚えているだろうか?

とある巨大な男性が就任式に突如として現れ、しかも新チャンピオンである『彼女』にポケモン勝負を仕掛けた出来事である。

く中略く

なお、結果としてはチャンピオンの勝利だったわけだが、結局あの男性は誰であったのだろうか。勝負後に男性の下に来たあのフラエツテらしきポケモンは一体？

当時、あの現場にいた人々に話を聞いてみると、大半の人が何故か男性の事を憶えていなかったのも不思議でならない…。

く中略く

又、数少ない証言者によると、男性の事を『絵本の人』だったと語っている。

恐らく『絵本の人』の『絵本』とは、カロスに伝わるを伝説を元にしたあの御伽噺の『大帝史カロス地方に伝わる御伽噺の一つ。詳しくはポケモン公式YouTubeチャンネルを参照してほしい。因みにこの話を伝えたのは、あのカエンジシ氏の祖先だとされている。』であると思われる。その登場人物だと証言者は思ったのかもしれない。

ただ、『大帝史』の話が本当であるならば、彼は遠い昔から生存している事になるので、証言者なりのロマンチックな比喩であろう。

く中略く

結論として、『彼女』と謎の男性の関係は不明だ。

しかし、あのポケモン勝負やその後の展開への『少女』の対応から、知り合いである可能性は高い。もしかしたら、フレア団事変で協力した様な関係かもしれない。

最後にあの男性だが、カロスの歴史に度々登場する『賢者』らしき人にとっても良く似ているらしい。

果たして本当なのかどうかは、彼のみが知っているに違いない…。

とあるネットニュース

????年RU月SA日掲載

『カロスチャンピオン、慈善団体を設立。』

本日E時、PNSのカロスチャンピオンの公式アカウントによると、カロスチャンピオンを代表とする慈善団体を設立するという発表があった。

く中略く

気になる慈善団体の名称だが、『未来へのムゲンの想いと可能性』を込めて『ムゲン団』という名称にしたいとコメントしており、『あるべき世界を目指して、ムゲンの可能性を追い求める。』を指標とするとしている。

く中略く

肝心の活動内容だが、エネルギー開発や困窮者への支援、社会インフラの整理、野生ポケモンや自然環境の保護等の活動をするとの事だ。

あとこれは未確認な情報ではあるが、この『ムゲン団』はあのフラダリラボを基に設立されたらしい。これが真実ならば些か問題のある組織かもしれない…。

〜とあるポケモンリーグ職員への業務連絡〜

☆☆☆☆年DA月PA日送信

『カロスチャンピオンについて』

突然だが、カロスチャンピオンが行方不明である事が発覚した。

執務室に遺されていた手紙の内容から誘拐等では無く、チャンピオン自身の意志で失踪した可能性が高いと考えられる。

〜中略〜

昨日PT時から本日にかけての間にカロスチャンピオンを発見した職員は速やかに本部へ報告、又、今後彼女を発見した場合、可能であるならば保護せよ。

もし抵抗された場合も遅滞行動や追跡を行い、捜索隊の到着迄行動を継続せよ。

〜中略〜

現在地方警察やポケモンレンジャーの一部を動員して捜索中であるが、今後半年以内に発見出来なかった場合は新カロスチャンピオンを決定するものとする。

なおこの事は機密事項とし、情報漏洩が発覚した場合は免職処分とする。

くとあるニュース番組く

□□□□年B L月W H日放送

『カロスが誇るあの『博士』が引退を発表！』

昨日の午後2時、メガシンカ研究の世界的権威である『博士』がポケモン研究から引退することが、カロスポケモン研究機構から正式に発表されました。

く中略く

なお引退理由として、『博士』自身の加齢による健康不安と説明されており、「これからは悠々自適に隠居生活を楽しもうと思っています。」ともコメントしています。

く中略く

又、研究所は弟子である御二人に譲ると発表しており、『博士』が行っていた研究についても彼等か引き継ぐとの事です。

続いてのニュースは……………。

本編

新・ムゲン団（カロス）

過去に戻りたい

人間であれば誰も彼もが、一度は思った事があるのではないだろうか。

例えば、食べてしまったお菓子をもう一度食べたい。

例えば、無くしてしまった玩具を手に入れたい。

例えば、もう二度と逢えない人に会いたい。

そう、例えば、あの運命の時の選択を変えたい。

人によって理由は異なるが、誰しもがやり直したい過去がある。

そしてこれは、その様な少女の結末の一つ…。

言うなれば、あり得たかもしれない運原作から二十五年後命の行方……………。

くミアレシテイ く ミアレタワー最上階 展望室

ミアレシティの中心地にはプリズムタワーを改築した『ミアレタワー』と呼ばれる巨塔が聳え立っている。

そのミアレタワー内にはポケモンジムの他、展望台や商業施設、更には行方不明となった元チャンピオンが設立した慈善団体であるムゲン団の本部が存在する。

その最上階にある展望室では、曇り無き夜空に浮かぶ月から届く光によつて、其処に存在する者達を照らし出していた。

一人は、喪服の様な目隠しと、漆黒のドレスを身に纏った少女。

そしてもう一人は、年季の入った旅装束を身に着け、彼の父親の過去の姿によく似た少年。

数多くの試練を、数多くの協力者達のお陰で乗り越えて、急いで此処に辿り着いたであろう少年に、少女は背を向け、窓ガラスの向こう側の景色を眺めながら、ただ静かに語りかける。

「此処に辿り着くのは、貴方だと思っていた」

「此の時代を生き、未来がまだ輝かしい貴方には、その資格があるから」

「貴方のお父さんでも、他の誰でもない貴方だけに」

「貴方も、もし私を止めたいと言うのなら……」

そこで言葉を切り、少女は振り返り少年少年に目を向ける。

「貴方も、この世界と共に消え去るがいいッ!!」

ムゲン団総帥の『セレナ』が 勝負をしかけてきた!

カエンジシの様な髪型をしたその男性に初めて出会った時、少女はその男性を変人だ
が凄い人だと思った。

次にその男性に出会った時、少女は彼を情熱的な理想家だと感じた。

その次にその男性に出会った時、少女は彼を努力家で善良な人だと思った。

そして、最後にその男性と出会った時、少女は彼を現実に破れた敗北者であり、彼の
描いていた理想の未来を引き継ごうと決意した。

その後、少女は好敵手であり想い人であった少年を倒し、遂にカロスのチャンピオン

となったが、同時に確かにポケモンは好きではあるが、好敵手である少年の様な強い意志でチャンピオンを望んだ訳では無いことに葛藤を感じていた。

然し、好敵手である少年はまだ夢を諦めてはいないと少女に断言し、いつか必ず少女を撃ち破つてみせると約束した事で、少女は多少救われた。

実際に好敵手の少年は何度もカロスリーグに挑戦し、最後は少女との白熱したポケモンバトルを繰り広げた。

そして好敵手が目指すチャンピオンに相応しくなる様に考え、ある組織を設立して彼の理想を少しでも実現しようと努力した。

しかし少女は、彼が何故あの様な狂気じみた行動に走ったのか理解した。

そう……。理解する他無かった。

『守る強さ……か。だが、君は何を守るのだ？ 今日よりも悪くなる明日か？』

あの言葉は間違っていないかった。

限られた資源を只々浪費してゆく人々。

他人を貶め、己の利益の為に行動する人々。

口では綺麗事を宣いながら、裏では汚職に手を染める人々。

そして、努力をせず他人の助けにのみ縋り、更に助けを求める人々。

守りたい明日とは、この様な未来の事だったのだろうか？

一日過ぎる毎に、世界はより悪くなる。

自分だけが、過去と変わらないままで。

そんな中、想い人である好敵手から結婚式の招待状が届いた。

相手は同時に旅に出た同年代の女性だと書いてあり、これからはポケモンバトルを控えてカロスリーグにも挑戦しないと考えていると書かれていた。

世界を知った少女の数少ないの心の支えと化していた好敵手との交流が無くなると

考えた時、少女は自身の心が砕けた音を聞いた気がした。

同時に、カロスリーグの執務室に置き手紙を遺して少女は行方を眩ませた。

少女の失踪はニュースにもなり、ポケモンリーグによる大規模な捜索活動が行なわれたが、少女の痕跡を示す物は何一つ見付からなかった。

ムゲン団という組織がある。

この組織は、少女が理想の世界を実現すべく設立した慈善団体であり、主に野生ポケモンの保護や孤児院・トレーナースクールの運営、環境保護等の活動をしている。

しかし当然のことながら、少女が失踪した事によって組織に混乱が広がっていた。代表である少女が消えた事で、組織の舵取りをする者が居なくなったのだ。

だが、その混乱は短期間で終息した。

副代表であり、炎タイプの四天王の座に君臨している女性が代表となったからだ。

新しく代表となった彼女は、ポケモンの生命力を源とする新たなエネルギー研究に注力する様に命じた。

表向きの理由は、環境に頼らない無限大エネルギーの利用による社会の発展の為だった

が、真の目的は違う。

無限大エネルギーの研究はとある少女からの指示であり、彼女はその真の目的を達成すべく行動していた。

過去へと戻り、あの方の理想を実現する為に…。

くアサメタウンく 民家

父親によく似た少年が、明日から始まる旅に向けた準備をしている。

トレーナーとなり旅に出れる年齢である十歳を超え、少年は既に十五歳となっている。

他のトレーナーに比べると遅いが、彼の父親も同じ年齢で旅に出て、今となっては此のカロスのチャンピオンとなり連勝記録を更新している。

勿論、少年の旅の目標は父親であるチャンピオンを超えることだ。

それを父親と約束し、実現出来るように努力してきた。

父を超えるという決意を新たにしたところで、彼の母親が少年に夕食の準備が出来た事を伝えた。

少年が居間に着くと、多忙な筈の父親も着席していた。家族全員で此の御目出度い門出を祝うのだ。

因みに、夕食は少年の好物であるリヨン（フランス版豚の角煮）だった。

食事が終わると、両親からプレゼントがあった。

プレゼントの中身は、タウンマップとキズぐすり、モンスターボールといった旅の必需品ばかりだ。

少年は両親に感謝し、自室に戻って相棒であるフォッコとハリマロンと共に、明日に備え川の字で眠りに就いた。

少年が去った居間では、両親が少年について話していた。

「ねえ、貴方。あの子、本当に大丈夫かしら？」

「問題ないよ。僕達の子供だ。きつと、この僕なんて軽く超えられるさ。」

「でも、もし彼女みたいな事になったら…。」

彼らの背後にある写真の中で、旅立ちの日に全員で撮った集合写真が、ひっそりと存在を主張していた。

そこには、居なくなつた少女と旅の同期達が、満面の笑みを浮かべていた。

そして、遂に旅立ちの日。

両親の見送りもそこそこに、少年は一番道路とメイスイタウンを抜け、二番道路に来ていた。目的は、最初のポケモンをゲットするためである。

しかし、少年にとって野生のポケモンを捕まえる事は初めての事であり、中々上手く出来ない。

時間ばかりが過ぎていき、段々と焦る少年。

そんな少年に、声をかける物陰が一つ。

少年がその声に驚き振り向くと、そこには一人の少女がいた。

喪服の様な服を着た、美しくも儂げで、そして何処かで見ただ事があるような少女だつ

た。

少女もまた、驚いていた。まるで、過去の想い人にそっくりだったからだ。
それは、そんな出会いから始まる ポケットモンスターX・Y 物 語 …。

第二話

当然の事だが、リーグに挑戦するにはルールがある。

まず始めに、特定の道路を使用すること。

これはトレーナーの安全保護のためだ。御隣の地方となるガラル地方のワイルドエリア程ではないが、野生ポケモンは危険であり、実力不足なトレーナーが被害にあう事は毎年のように起きている。その様な悲劇を起こさないように、という事だ。

次に、チャンピオンリーグ開催期間までにジムバッジを八つ集めること。

ポケモンジムは全部で八箇所在り、その全てを巡らなければならぬ。順番は決まっておらず、各々で一番近い場所を最初にする場合が多いが、稀に熱狂的なチャンピオンファンは、聖地巡りと呼ばれる巡り方をする。簡単に言えば、ハクダンシティからスタートし、エイセツシティを最後のジムとする事だ。

最後に、他人に迷惑を掛けない事。

極々偶にだが、他人に迷惑行為をはたらき失格になる人がいる。ポケモンや金品の強奪は犯罪であり、過激な迷惑行為も公共の福祉に反する。

勿論、リーグは防止の為に監視員を配備しているが、未だに迷惑行為をする人がいる。

例えば、反社会的勢力や人間至上主義者等だ。

そして今、リーグはこの問題に直面していた。

「カロスリーグ」 チャンピオン執務室

貴方が想像するチャンピオンとは、一体誰だろうか？

地方や時代によって異なるだろうが、此のカロス地方では、少年の父親である一人の事を指す。

そのチャンピオンは就任以来無敗を誇り、而もカロスの英雄の一人である事も重なり、爆発的な人気は留まるところを知らない。

そんな少年の父親は今、ムゲン団本部の代表者を務める四天王から、とある報告を受けていた。

「『ムゲン団を名乗る集団による事件が多発し、被害届が多数出ているが、偽装集団による可能性大』か……。これは本当か？」

「はい、チャンピオン。ムゲン団の複数の団員から聞き取り調査を行い、エスパーポケモンでの調査でも同様の結論が出ています。また、監視カメラ映像による顔認証でも、団員に一致した者はありませんでした。」

「そうか……。市民には注意喚起を行い、リーグから監視員を増やすしかないな。それと、各ジムリーダーには、追加情報があれば、直ぐ此方に通達するようにと伝えてくれ。」

「了解致しました。それと……別件ですが、トレーナーが所有するメガストーンの強奪事件が、度々発生しているようです。」

「またか……。分かった、この件は僕の方で処理しよう。犯人は相当な手練だと予想される以上、誰かに任せる訳にはいかない。」

彼はそう答えると、直ぐに部屋を出て行く。

そして部屋には女性だけが残り、此処にはいない元部屋の主のことを思い、今は亡きあの方のことを思い、そして彼女達の悲願について考えていた。

あの運命の出会いから数刻後、少年は少女の教えによって、初めて野生のポケモンであるヤヤコマを捕まえる事が出来た。

この時既に少年は、少女の事が気になり始めていた。

簡単に言えば一目惚れというやつだ。

少女の何処か悲しげで儂げな雰囲気の中に、時々魅せる笑顔が、とても好みだったのだ。

その様な夢現な少年に、少女は「貴方は何処に行くの」と聞く。

少年が「ハクダンジムに。」と答えると、少女は何処か遠い目をしながら、何かを呟いた。

少年は聞こえなかったのか、不思議に思った様な顔したが、直ぐに気にするのをやめた。

しかし、もしその呟きが聞こえていたら、未来は少々違った物になっていただろう。

『あの始まりの日は…もう二十五年前なのね…。』という…。

少女は表の地位を捨て、裏から目的を達成する事にした。

少女の表の立場で目的を達成するには、あまりにも難しいと思ったからだ。

あの最終兵器はポケモンリーグ本部の管轄に置かれ、常に監視の目がついている。

起動させようにも、電力とエネルギーが確保出来ずに失敗する事が目に見えている。

少女の立場では、入ることは出来ても起動することが出来ない。

あの事件は、リーグからの邪魔が無く、且つフレア団というカロス地方を牛耳っていた組織だからこそ出来たのだ。

そこで、少女はある事を考え、実行した。

まず少女は、自分が失踪を装った理由と目的を炎タイプの四天王である彼女に告げた。

過去に戻り、あの方の最後の理想を実現しようと話した。

そして彼女には、表の顔としてムゲン団の代表になつてもらい、その立場を利用して

とあるエネルギーを研究してもらうことにした。

次に少女は、悠久の時を過ごした王に協力を頼んだ。

王が創造したあの機械について詳しく知り、この体質を治したいと語った。

彼には真の目的を告げずに表向きのメインプランとして体質の研究、サブプラン（という名の真のメインプラン）としてこの体質を無くす為という目的で、体質操作の方法と過去転移への機械の制作をってもらうことにした。

その次に少女は、既に弟子達に研究所を譲ると決めていた博士の家を訪ねた。

博士の後悔である彼を止められなかった事に付け入って、過去に戻り正しい選択をしようとした。そして彼には、エスパーポケモンの研究で特定の時間に転移する方法を探してもらうことにした。

最後に、彼女は自分の同士を探すことにした。

世界に絶望し、破滅を望む者。

取り返しのつかない失敗をし、やり直しを望む者。

未来を不安視し、過去という不変を望む者。

社会から弾き出され、暗い道しか歩めない者。

このような者達を集め、少女は彼等を裏のムゲン団とする事にした。

彼等の協力もあり、遂に過去転移計画はあと一歩という所まできていた。

組織での活動に余裕ができ、少女はメイスイタウンに来ていた。自然溢れるこの街で、少し休憩しようとしていた。

そんなカフェのテラス席に座る喪服の様な服を着た少女に、周囲の人々はチラチラと好奇の眼差しを向けたが、少女は気にしていなかった。

何故なら、少女の視線の先に、見覚えのある服を着た少年が見えたからだ。

まるで、あの頃の好敵手の生き写しの様な少年は、橋を渡り二番道路に走って行ってしまうった。

その様子を呆然として眺めていた少女は、急いで代金を支払うと二番道路に向かって行つた。

それが運命の悪戯か何かなのかどうかは、当人達しか知らない。

ハクダンの森と三番道路を抜け、少年と少女はハクダンシティに辿り着いた。

此処で二人は別れ、少年はハクダンジムに向かう事になる。

そんな別れ際に、少年は少女に問い掛ける。「また会うことは出来ないか？」と。

少年としては、気になる女子の前だということ、結構緊張し勇気を振り絞ったのだが、そんな様子が少女には可笑しく思えた。

クスツと笑うと、少女は微笑んで「ええ、勿論。」と答える。

そして少女は、一つのタマゴを少年に手渡す。

少年は驚き、本当にいいのかと少女に問い掛ける。

その質問に対し、少女はこう答えた。

「コレが生まれた時、また会いましょう。」

そんな言葉を残し、少女は少年と別れていった。

少年は少女の後ろ姿を眺め、名残惜しそうにしながら、タマゴを抱えてポケモンセンターに向かった。

ハクダンシティで少年と別れた少女は、ムゲン団本部で団員から報告を受けていた。

「そう、『愚者』が裏切ったのね。」

「申し訳ありません、総帥。我々の真の目的を知り、それならば協力出来ないと言って転移装置を破壊しようとした為、戦闘となり逃げられました。現在は捜索中です。幸い、転移装置は無傷であり、計画に支障はございません。」

「ならいいわ。それで、他に報告は？」

「はい。『博士』による転移時間の設定に関する問題は解決致しました。しかし、主要エネルギーである無限大エナジーの収集と、予備エネルギーとして使用するメガストーンの収集が捗っておりません。」

「そう…。なら『炎獅子』に研究を急がせて、他の幹部団員はメガストーンの収集を急がせなさい。」

「了解致しました。それでは、失礼します。」

団員が部屋から去り、少女は溜息を吐く。

そして椅子から立ち上がり、街頭等で煌めく夜景を眺めながら立ち尽くす。

考えると頭に思い浮かぶのは、あの少年。

少女は、ハクダンシティで昼間に別れた時に、自身の相棒であるケロマツのタマゴを少年に渡した。

今でも何故渡したのか、不思議でしょうがない。而も、再会の約束までして。自身の目的の障害になるであろう少年を、より強くするだけだというのに。或いは…。

「私の事を、誰かに止めてほしいのかしら…？」

そんな孤独の少女の疑問に答える声は、何時になっても聞こえなかった。

第三話

「ハクダンジム」 バトルコート

ハクダンジム特有の蜘蛛の巣状のギミックをクリアし、初めてのジムリーダーとのポケモンバトルに勝利した少年は、見事バグバッジを手に入れた。

掌で感じる初めてのバッジの感触と、初めてのジム戦を制したその興奮に、相棒であるフォッコとハリマロン、ヤヤコマと共に少年は喜んでいる。

心做しか、少女から受け取ったタマゴも、少し揺れて喜んでいる気がしなくも無い。そんな、仲間と勝利を喜んでいる少年に、声が掛けられる。

「チャンピオンから息子さんが挑戦するとは聞いていたけど、まさか此程とはね。正直に言って驚いたわ。」

少年が振り向くと、其処には此処ハクダンジムのジムリーダー兼写真家の女性が、此方に歩いて来ていた。

少年は、喜んでいる姿を見られたことを少し恥ずかしがりながら、彼の父親について質問する。

「貴方のお父さんと比べて、自分はどうかだったかって？ 貴方のお父さん…いや、チャン

ピオンだったら、貴方と同じ位強かったわよ。というか、チャンピオンの同期は大抵強かったわ。特に、彼女はね…。」

そんな風に彼の父親の同期のことを語る女性の顔は、少年の両親が同期の話をする時と同様に、何処か悲しそうに見えた。

く四番道路く

ジム戦の傷を癒し、父親から紹介のあったミアレシティのポケモン研究所に向かう為、少年はハクダンシティを後にし、四番道路に来ていた。

四番道路は、通称『庭園街道』とも呼ばれ、道路中央に位置するペルルの噴水広場や、道路両脇には延々と続く花壇と街路樹等が存在する。

その光景が非常に優雅であり、且つミアレシティという大都会に近い為、恋人や夫婦に人気のデート場所となっており、休日には非常に混雑する場所だ。

そんな四番道路をミアレシティに向けて進んで行くと、そこでは小さな女の子と、ムゲン団の応援Tシャツを身に着けた男性が、何やらざわついていた。

気になった少年が様子を見てみると、どうやら女の子のポケモンを、男性がバトルの賞金の代わりとして奪おうとしているようだった。

少年がその騒ぎに割って入り、少年が男性との勝負に勝ったらポケモンを返し、逆に少年が男性との勝負に負けたら、自身のポケモンを譲渡しようと男性に勝負を申し込んだ。

男性はそれに合意し、少年の負けられない戦いが幕を開けた。

結果として、少年はバトルに勝利し、ポケモンは無事に女の子の元に戻った。

少年に敗れた男性は、三流の悪役の様なセリフを吐きながら、何処かに消えていった。そんな男性を尻目に、少年は女の子を家まで送って行く事にした。

少年が女の子に「お父さんとお母さんは？」と聞くと、女の子は少し悲しそうに「い

ない。事故で死んじゃった。」と答えた。

少年は聞く事を間違えたと思ひながら、何処まで送ればいいと聞こうとした時、女の子の名前を呼ぶ声が聞こえた。

少年と女の子が、声が聞こえる方向に行つてみると、其処ではムゲン団のTシャツを着た女性が、必死に女の子の名前を呼びながら探していた。

少年が先程の男性の仲間かと思ひ警戒すると、女の子はムゲン団の女性に向かつて走り出した。

何かが走つて来る音に気付いたのか、女性は女の子の方をみると、女の子が女性に飛び付き、女性は名前を呼びながら抱き締めた。

それに困惑した少年が少し啞然としていて、女の子から事情を聞いた女性が、少年に感謝の言葉を述べてきた。

女性は少年に御礼を渡そうとするが、別に感謝される程の事では無いとして、少年は固辞しようとする。

そこで、女性は少し話を聞いて欲しいと言って、近くのベンチに座り、少年に座る様に薦める。

少年が女性の隣に座ると、女性が静かに話し始める。

話しによると、女性はムゲン団の運営する孤児院の職員らしく、遠足として四番道路

に来ていたが、女の子が居なくなつた事に気づき、他の職員と共に女の子を探していたらしい。

そんな女の子のポケモンは、彼女の両親の最後の形見らしく、他の遺品は全て親族に取られたそうだ。

そして、面倒を見る女性自身も、子供と夫、相棒であるポケモンを亡くしたらしく、今の職に就くまで精神的に不安定だったそうで、孤児の子供達を自身の子供の様に愛しているという。

だからこそ、子供を助けた御礼として、相棒のポケモンの形見であるメガストーンを受け取って欲しい、という。貴方の様な優しいトレーナーが使ってくれた方が、相棒も喜んでくれる、と。

そこ迄言うのならばと、少年は御礼であるメガストーンを受け取る。

すると女性は、少し寂しそうにし、しかし嬉しそうに「ありがとう。」と告げ、女の子を連れて帰って行った。

少年は、受け取ったメガストーンを感慨深げに眺め、暫くして立ち上がり、ミアレシティにある研究所を目指し足を向けた。

「ミアレシテイ」 『博士』邸

「ミアレシテイの見所は？」という質問には、非常に多くの答えがでる。

観光客であれば、ミアレ美術館やミアレタワー、そして御土産として人気のあるミアレガレット本店。

多少の富裕客であれば、ブランド物を扱う商店の総本店や、本場のカロス料理を扱う高級レストラン。

此処迄は極普通の市民から見た見所だが、研究者やトレーナーから見た「ミアレシテイの見所」は大分異なる。

彼等にとつての見所とは、ポケモンの生態や強さに関わる場所だ。

そして、此処ミアレシテイには、そんな見所が存在する。

それは、とある『博士』の名を冠したポケモン研究所だ。

その研究所は、メガシンカ研究において世界最先端を誇っており、現在は『博士』の弟子達が研究を続けている。

そんな研究所から少し離れた住宅地に、件の『博士』の邸宅が存在する。

其処の主は、此のカロスのポケモン研究において、非常に名高い人物だ。

今では弟子に研究所を譲り、自身は隠居に近い生活を送っていた。

そんな彼が研究者を辞めた理由は、高齢による健康不安とされているが、実際は違う。彼が深く後悔した『あの事件』あの運命の時を起こさせず、今は亡き友人を引き止めよう、という

少女の言葉にのる事にしたからだ。

それに、少女に対する罪悪感があつた事も、理由の一つだ。

世界の救済と引き換えに、少女の未来を奪つてしまった、という…。

しかしその為には、研究所を捨てるしかなかった。

何故ならば、ポケモンリーグからの支援を受けている研究所では、定期的な立入検査と研究報告の義務があつたからだ。

だが、目的達成の為の研究、即ち時空転移に関係する研究は、国際的に禁止されている。

『博士』自身は、禁止された研究で逮捕されても構わないが、彼の弟子達の将来を、彼自身の都合で壊すのは出来なかつた。

だから、彼は自身の栄光の象徴である研究所を捨て、少女の為に尽くす事にした。

それが、少女に対する償いだと考えて…。

だが、少女の考える運命の時と、『博士』の思う運命の時七き女人の説得は違う事を、『博士』はまだ気づいていなかった…。

くミアレシテイく 四番道路ゲート付近

無事にミアレシテイに辿り着いた少年は、カロス地方一の大都会の街並みに驚いていた。

少年が暮らしていたアサメタウンは、自然溢れる長閑で牧歌的な田舎街だったが、ミアレシテイは時代の流行に応じて目まぐるしく変化し、人々の活気と灯りが途切れる事の無い光の都だ。

勿論、ミアレシテイには旧市街と呼ばれる地域が存在し、其処では景観保護の為、土地の開発規格は厳格になっており、古き良きカロスを残している。

人々の群れと建造物に驚く上京したて丸出しの少年に、とある人物が近づいて声を掛ける。

その声に驚き、ビクビクとしながら声が聞こえた方に少年が振り向くと、其処には老の寝癖がついた髪型の男性が立っていた。

少年の驚いた様子にその男性は少し笑いながら「チャンピオンから案内を頼まれた。」と答えた。

その言葉に少年は少し前に届いた父親からのメールを思い出した。

其のメールには「ある人物にポケモン研究所迄の案内を頼んでおいた。」と書かれていた。

メールを思い出した少年が納得し、案内を引き受けてくれた事への感謝をすると、其の男性は微笑みながら「隠居した身なので構わない。」と答えた。

少年がある程度落ち着いた段階で、「ポケモン研究所迄案内する序に、途中少年の為にポケモンセンターに寄ってから行こう。」と男性は言い、少年に逸れずに付いて来る様にと言つて歩き出す。

少年は男性と逸れない様に付いて行き、無事に目的のポケモン研究所の前に辿り着くことが出来た。

其処では、ミアレシティの中央に向かう大通りの一つであるプランタンIIアベニューの向こうにあるミアレタワーが見える。

そのミアレタワーを見た時、少年は何故か少女の事を思い出した。

そんな少年がミアレタワーを見て何か思い出している横で、案内人である男性は何処か複雑な表情をしていた…。

ポケモン研究所の受付に事情を話し、父親から紹介のあった人物達が来るまでに、男性は少年と別れる事にした。

少年が案内の感謝を伝えると、男性は「旅の幸運を祈っている。」と告げて去って行く。それから数分後、仮面が似合いそうな褐色の女性と、同じく仮面が似合いそうな金髪の男性が、少年の待つエントランスホールに出て来た。

彼等は少年に「自分達が少年の父親が紹介した人物であり、此の研究所のポケモン博士なのだ。」と話す。

そして「少年に渡したい物があるので、付いて来て欲しい。」とも続けた。

少年が博士達の問いに頷くと、彼等は研究所の最上階にある所長室に向けて昇っていった。

其の様子を研究所の入口から少し離れた場所で、案内人であった男性が静かに見ていた。

彼は弟子であったポケモン博士達や若き日のチャンピオンに瓜二つな少年に対して、罪悪感と組織の目的に対する猜疑心を抱いていた。

弟子達の栄達した姿を改めて見た事で、此の世界も悪く無いのではないかと思っただ。

ムゲン団の本部に居るであろう少女に対して、計画の中止を提案しようか、と思ったその時。

「まさか…此の世界を、存続させようと、思っていないせんよね…『博士』。」

男性の背後から、此処に居るはずの無い少女の声がした。

男性がその声に振り向くと、其処には喪服の様な服を着た少女が、ひっそりと立ち尽

くしていた。

よく見ると、レースの目隠しの向かうに見える瞳は、まるでダークホールの様に、一切の色彩を映していない。

驚きで言葉が紡げ無い男性対し、少女は少しずつ近づいて行く。

男性は金縛りを喰らったかの様に動けず、少女はそんな男性に抱き着いて、耳元で囁く。

其の声と体は二十五年前と変わらなかつたが、其の精神は底知れぬ闇となる程に、大きく変化していた。

「私の未来を奪い、私を化物にした貴方を、私は絶対に赦さない。」

少女の其の言葉を聞き、男性は少女への罪悪感で、自分の過去を恨み、更なる絶望を意識した。

そんな男性を絶対零度の視線で見つめ、彼が組織を裏切ら無いと判断した少女は、暗い路地裏に消えていった。

少女が去った其処には、自分自身に絶望した男性が、ポツンと項垂れていた。

第四話

「ミアレシテイ」 ポケモン研究所 所長室

ポケモン博士である二人に連れられ、少年はポケモン研究所の所長室に来ていた。

部屋に置かれた周囲のボードには、少年には理解出来そうにない資料が汎ゆる場所に貼られ、其の近くには何に使うのかよく分からない計測機械が置かれている。

しかし、少年が目にした其の部屋の壁には、一枚の人物画が飾られており、しかも其の絵に描かれた人物は、少年が何処かで見た事がある様な人物だった。

少年が二人に、此の絵画の人物は誰なのか、と聞くと、博士達は、自分達の恩師である人物だ、と答えた。

少年が其の絵を眺めている間に、博士達は少年に渡す物を準備したのか、少年に声を掛ける。

博士達の呼び掛けに、少年は絵画を見るのを止めて、博士達の方へ駆け寄る。

少年が二人の前で停まると、博士達は少年にとある機械を手渡した。

博士達の説明によると、どうやら此の機械はポケモン凶鑑という物らしく、一度捕まえたポケモンならば、生息地や生態が分かるという優れ物らしい。

しかも此の機械は、少年の父親が使っていたという一品だ。ネットオークションに流せば、数百万の値が付く事だろう。

流石に二十五年前とは違い、凶鑑のバージョンアップはされていて、少年の父親の時代とは少し生態系が変わってしまった所がある。

例で言えば、少年の父親の時代に荒れ果てていたホテル跡地は、治安改善と観光客の誘致という目的で新たなホテルが建設され、現在其のホテルは、ミアレシテイのグランドホテルと並ぶカロスを代表するホテルとなっている。

しかし、其処に生息していたポケモンは移動を余儀なくされ、ホテル跡地から十四番道路に存在する廃墟へと生態系が変化していた。

そんな父親からの思い掛けないプレゼントを受け取った少年は、仕事で忙しいであろう父親と協力してくれた博士達に感謝した。

そんな新しい玩具を手に入れた子供の様な、少年の大変嬉しそうな表情を見て、博士達は互いに微笑みを浮かべていた。

くミアレシテイく ミアレ出版 本社ビル

ポケモン研究所でポケモン図鑑を手に入れた少年は、数日の間ミアレシテイを散策する事にした。

其の散策で観た何もかもが少年にとって目新しく、又非常に興味溢れる物ばかりだった。

スタイリッシュ且つクールでなければ入れそうに無い衣料品店やレストラン、トリミングで有名なポケモン専用の美容室や独特な名前のカフェ、ポケモンの進化の石やモンスターボールのみを扱う専門店等々、少年の年頃の感性が刺激される街並みだった。

そんな少年は、ハクダンジムのジムリーダーから、彼女の姉がミアレ出版という会社で働いている、と言っていたのを思い出し、其の会社に少し寄って見る事にした。

そして今、ミアレ出版の本社ビルに着いた少年は、ハクダンジムのジムリーダーに似た雰囲気を持つ女性から熱烈な歓迎を受けていた。

其の熱烈な歓迎に少年が困惑している事に気付いた女性は、周囲を気にしながら一度咳払いをすると、少年に自己紹介をする。

自己紹介によると、彼女こそがハクダンジムのジムリーダーが言っていた姉であり、

此の出版社の編集長を務めているのだそうだ。

そんな彼女が少年に対して熱烈に歓迎したのは、妹から、次のチャンピオンになるかもしれない逸材だ、と連絡を受けたからだという。

しかも、其のトレーナーはカロスの英雄であるチャンピオンの息子だといふのだから驚いた、という事も。

少年は、自身がそこ迄評価されているとは思わず、彼女の言葉を聞いて少し恥ずかしそうにしながら頭を掻く。

そんな少年の様子を見て、女性は、お勧めの場所があるから、そこでゆっくり話をしたい、と告げ、少年に紙切れを渡して出て行つた。

少年は地図の描かれた紙切れを受け取り、其の紙切れが示す場所に向かった。

少年が地図に描かれた場所に着くと、プリズムタワー近くの其処には紅を基調としたカフェがあった。看板には「カフェ・ド・プルプル」と書いてある。

少年が恐る恐る店内に入ると、既に編集長である女性が席に座って待っていた。

すると、少年に気付いた女性が手を振り、対面の席に座る様に促す。

そして少年が席に座ると、店員が注文を聞きに来る。

女性はエスプレッソとサンドウィッチを頼み、少年はカフェ・クレム（カフェ・オレの事）を注文した。

注文が来る間、少年は女性に、ミアレシテイの観光名所を教えて欲しい、と話し、女性は今々とその場所を教えていく。

注文した品が届くと二人は一度会話を止め、暫しの間其れを堪能した。

其れが終わると、今度は女性少年に対して、今後の意気込みの質問していた。

時間が過ぎ、仕事に戻らなければならない、という女性が最後に、好きな人はいるのか、と少年に聞く。

其の質問に少年は顔を赤くしながら、気になる人はいる、と俯きながら答える。

其の回答に微笑ましい様子を見せた女性は、少年の分の代金も支払って去って行った。

少年がそのまま席に座って呆然とし、気になる少女の事を考えていると、此のカフェにカロスだけで無く世界でも有名な女性が入って来た。

其の女性はカロスが世界に誇る女優であり、トレーナーとしてもトップクラスに位置

している。

そんな女性が少年に、相席をしてもよいかと尋ねる。

有名人を前にして驚いている少年が了承すると、女性は席に座り、ガラルのターフタウン産の茶葉を使ったテ・ナチュー（紅茶の事）を注文する。

店員が静かに淹れるを準備していると、女性は緊張している少年に語り掛ける。

「貴方は、お父さんとよく似ているわね。」と。

其の言葉に驚いた少年は、何故自分を知っているのか、と彼女に問い掛ける。

すると女性は、彼の父親が旅していた時に知り合い、今現在も手紙の遣り取りをしているからだ、と答えた。

それに、貴方が過去の少年の父親にそっくりだから、とも。

自分の父親が目の中の女性と遣り取りをしていた事に対し、其の事を初めて知って驚愕の表情を浮かべる少年に、女性は上品且つ微笑ましげに笑った。

その後暫く女性と会話し、少年が店を出る為に席を立とうとした時、女性が少年を呼び止める。

そして女性は、貴方になら任せられる、と言つて、一つのモンスターボールを取り出す。

女性が其のモンスターボールのボタンを押すと、中からは色違いのラルトスが出て来た。

其のラルトスは周囲をチラチラと観察した後少年を見つめ、彼の方へと歩み寄る。

其の様子を見た女性は、貴方の事が気になるみたい、と言つて、少年にラルトスと目を合わせる様に促す。

其の言葉に促され、少年がラルトスと目を合わせると、ラルトスは少年をジッと見つめた後に彼のズボンをギユツと掴んできた。

少年が女性に目を向けると、女性は静かにモンスターボールを手渡す。

ボールを受け取った少年がラルトスに呼び掛けると、ラルトスは嬉しそうな鳴き声で返事をした。

少年の旅に、新たな仲間が加わった瞬間だった。

く終の洞窟く 地下神殿 禁足の間

此の世界には、ポケモンに関する数多くの神話や伝説が存在している。

有名な話では、カントー地方の『三羽鳥』、ジョウト地方の『不死鳥』と『海神』と『三獣』、ホウエン地方の『大地と海の化身』や『隕石と龍皇』、シンオウ地方の『創世神と三神』や『人造巨神』や『精神の神々』、イツシュ地方の『真実と理想の双竜』や『人喰いの氷竜』、『三剣士』、アローラ地方の『太陽神』と『月神』と『異界の神々』、ガラル地方の『闇黑夜と剣と盾の英雄』と『雪原の王』等がある。

そして勿論此のカロス地方にも、とある伝説が存在する。

遙か昔に『怪物』の手によつて滅んだ此のカロスは、とある『聖獣』の力によつて、再び緑溢れる自然の楽園になったのだという。

しかしその後、とある『魔鳥』の襲来によつて、此のカロスは滅びの危機を迎えた。

そこで人々とポケモンは、滅びの運命を避ける為に『聖獣』の力を借り、『魔鳥』を封印する事にした。

結果として、多くの人々とポケモンの犠牲によつて、『魔鳥』を深い眠りに就かせる事に成功した。

だが、其の封印の為に力を使い果たした『聖獣』も、深い眠りに就く事になった。

人々とポケモンは、『聖獣』に救われた事に対する深い感謝を示す為、とある神殿を創り上げて埋葬し、『魔鳥』の亡骸も同時に封印する事にした。

そして、其の神殿の番人として『蛇龍』を配置し、神殿を聖なる地として禁足地にした。

其れから数百年後には、人々は神殿の事を忘れ去り、神殿には番人である『蛇龍』だけが遺された。

其の『蛇龍』も何時しか番人としての役目を忘れ、神殿に近づいた者を無差別に襲う様になった。

しかし、とある少女の物理的な説得によつて役目を思い出し、今後はカロスの平和を維持する役目を負う事に決め、此の地を去つて行つた。

『蛇龍』が去つた其の神殿は現在、三十年前に廃坑となつた「終の洞窟」と呼ばれる場所に位置している。

そんな場所にある神殿の最奥部に、とある集団がある物を探していた。

そして団員の一人が、目標物である古代の遺物を発見した。其の遺物とは、伝説に語られるポケモンの片割れが、深い眠りに就いた姿だった。

発見した集団の長である男性が、目標物を速やかに運び出す様に指示を出し、他の団員には撤収作業をする様に命令する。

命令を受けた彼等は直様行動に移り、数分後には跡形も無く消えていった。

くミアレシテイ くミアレタワー ムゲン団本部

ムゲン団本部のあるミアレタワーの最上階で、少女は普段は見せない笑顔を浮かべていた。

少女の特命を受けた捜索班から、目標物を回収した、という連絡を受けたからだ。

少女の計画は、今の所順調に進んでいる。

しかし、予想外の事が起きているのも又事実だ。

『愚者』の裏切りやリーグからの妨害、裏のムゲン団以外の偽ムゲン団の活動等々、女の計画の邪魔は予想以上に多い。

だが、其れが何だと言うのだろうか。

これしきの事を乗り越えられずに、少女の目的は達成出来ない。

そう：其れが例え、地獄に墜ちる事になったとしても、だ。

少女はもう、引き返せない所迄来てしまったのだ。

そんな少女は、狂った様に突然大声で嗤い始める。

しかし其の声とは裏腹に、少女の眼は何処か哀しい瞳をしていた…。

第五話

（五番道路）

五番道路の一带は緩やかな丘陵地帯が続いており、其の地形により、此の地域はカロス一の農業地域となっている。

カロス地方一の大都会であるミアレシティの近くに位置するのも、此の地域で農業が発達した要因の一つだ。

そして農業地域である此処で生産された穀物は、ミアレシティのみならず此のカロス地方の食卓を支えている。

そんな田園風景が続き畑特有の匂いを感じさせる五番道路を、ミアレシティの観光を終えて次のポケモンジムがあるシヨウヨウシティに向かっている少年が歩いていた。

少年は此の道路を歩いていると、自身の故郷であるアサメタウンを思い出した。

数日前に見たミアレシティも良い街だったが、やはり少年は都会が苦手だと感じていた。

少しホームシックになった少年だが、全てのジムバッジを集める迄は故郷に帰らない、と固く心に決めている。

父親を超えるチャンピオンになると決めたあの日から、少年は此の旅を長年待ち望んでいたのだから。

少年が決意を改めていると、ムゲン団の格好をした男女が少年に近寄って来る。すると彼等は、少年のポケモンを寄越せ、と言ってきた。

其れに対して少年が拒否すると、彼等は少年のポケモンを強引に奪おうと其々ポケモンを繰り出した。

其れに応じて少年がポケモンを繰り出そうとすると、突如として空から一人の男性が、少年と彼等の間に着地する。

突然の乱入者に驚く全員であったが、其の男性の正体を認識すると、少年は驚愕の声を上げた。

なんと其の男性は、少年の父親であるチャンピオンだったからだ。

少年の父親は、空で見た時から少年の事を分かっていたのか、少年に一瞬だけ目を向けると、少年にポケモンを出す様に指示を出す。

ムゲン団の格好をした男女は、既にポケモンを出してしまった為に引くにも引けない状況になってしまった。

すると少年は、父親の相棒の子供であるハリマロンが進化した姿であるハリボーグを

繰り出す。

少年の父親は、少年のハリボーグを嬉しそうに一瞥すると、自身の切り札であるアプソルを繰り出した。

そんな少年にとって初めてのダブルバトルは、とても思い出深い物となった。

初めてのダブルバトルに勝利し、父親が呼んだ警官達の手によって連行されて行く男女を見届けた少年は、父親に、何故此処に来たのか、と疑問を投げ掛ける。

すると少年の父親は、息子が心配になって来た、と発言したが、其の理由を聞いた少年は、父親に対して冷たい視線を向ける。

其れに気付いた父親が慌てて訂正すると、今度は急に真剣な表情をし、今とある事件が発生していて、其の見回りの途中だったからだ、と答える。

その後の別れ際に、少年に対して、メガストーンを探している人物を見かけたら気を付けろ、と警告し、少年の父親はチルタリスに跨って去って行った。

其の言葉を聞いた少年は、鞆の中にあるメガストーンを取り出し、手に持って天に透かしてみた。

メガストーンは煌々とし、中の模様を写し出す。

其の模様は何故か、少年の運命の螺旋を示している様に見えた。

くコボクタウンく ポケモンセンター

コボクタウンからシヨウヨウシテイ迄の渓谷には、数多くの古城が存在している。

其の城の中には廃墟となってしまう場所もあれば、個人所有となり住居として使われている場所もある。

しかし、大半の古城は観光が可能であり、中にはホテルやレストラン、カフェとして運営する場所も多い。

そして、此の渓谷一帯は果実栽培が盛んであり、果実酒の製造において、世界的に高い評価と古い歴史を誇っている。

此処コボクタウンに存在する「シヨボンヌ城」も渓谷沿いに点在する古城の一つであり、主に観光と果実酒製造で有名な場所だ。

又「パルファム宮殿」への最寄り街である事から、観光客が絶える事は無い。

五番道路を通り無事にコボクタウンに辿り着いた少年は、少し手持ちのポケモンを鍛える序に「パルファム宮殿」を観光してみる事にした。

何故ならば、五番道路を歩いていた途中で少女から貰ったタマゴが孵り、ケロマツが生まれたからだ。

序に少年は少女との約束を思い出し、同時に天の御告げの様な言葉が頭に浮かんだ。

「パルファム宮殿」に行けば少女に会える、という。

其の言葉に感化された少年の行動力は凄まじく、道中に立ちほだかるトレーナー達を薙ぎ払うが如く打ち倒し、電光石火の速度でコボクタウンに向け進んで行った。

そんな少年は先程の道中の疲れが出たのか、ポケモンセンターにある個室の寝台に横になると、直ぐに泥の様に眠ってしまった。

彼のポケモン達は少年を呆れた様な目で見た後に、全員で目を合わせて静かな声で笑った。

くパルファム宮殿く

六番道路の並木道を抜けると、其処には巨大な宮殿が建っている。

其の宮殿は三百年程前に当時のカロス王が建設し、市民革命によつてカロス王が退任し共和制になるまでの王の住居であつた建物である。

現在は其のカロス王の子孫が所有しており、カロス市民には無料で公開されている。

其の様な経緯を持つ宮殿を前に、少年は自身の感を信じて少女に会う為に訪れた。

豪華な金装飾が施された門を潜り、少年が宮殿のエントランスホールに入ると、其処には黄金のミロカロス像が鎮座していた他、天井から吊るされた巨大なシャンデリアや数々の絵画、そして金色の光を放つキリキザン像や騎士甲冑が飾られていた。

其の輝きに圧倒され、暫し呆然としていた少年だったが、自分の目的を思い出し少女を探す事に専念した。

其れから暫くして、少年は宮殿のとある一室の前にいた。部屋を表すプレートには「文献展示室」と書かれている。

少年が其の部屋の扉を開けると、其処には目的である少女がいた。

しかし、少女は何やら集中しているらしく、部屋に少年が入つて来た事に気付いてい

ないようだ。

其の事を少し残念に思ったが、少女が真剣に見ている巻物が気になり、少年が其れを覗いて見ると一つの絵が描かれていた。

其の絵には、枝分かれした角を持ったポケモンと爪がついた翼を大きく広げたポケモンが戦っている様子が描かれている。

少年が其の絵について考えていると、漸く少女は少年が居る事に気付き、非常に驚いた様子を見せる。

少年は、何をしていたのか、と少女に尋ねると、少女は、カロスの伝説について調べていた、と答えた。

どうやら此処の資料は大変貴重な物らしく、抑々伝説についての資料の数自体が少ないそうで、此のカロスの伝説は謎に包まれている物が多いらしい。

そんなカロスの伝説の謎の一説には、イツシュ地方の『三剣士』は元々カロスの伝説の一つであった、という物もある程だ。

少年が先程の絵に描かれていたポケモンについて質問すると、少女は伝説に登場する『聖獣』と『魔鳥』だと答えた。

伝説となる程の力を持つポケモンについて少年は少し興味を持ったが、直ぐに少女に報告しなければならぬ事を思い出し、少女に、少し話したい事があるので移動しよう、

と言うと、少女は少し悩む素振りを見せた後に了承した。

宮殿内の展示室から庭園のベンチに移動すると、少年はモンスターボールを取り出し、ボールのスイッチを押す。

すると中から少女が渡したケロマツが出て来て、少年の膝の上に飛び乗る。

そんなケロマツの様子を見た少女は嬉しそうに微笑み、ケロマツの頭を撫で始めた。

撫でられる事を恥しそうにしながらも、其れを受け入れるケロマツを見て、少年は笑顔を浮かべる。

其の光景を見た周囲の人々は、微笑まじげしながら静かに、少年と少女の邪魔をしない様去って行く。

其の事に気付いた少年が、人々に軽く頭を下げた感謝すると、少女も其れに気付いて同じ様に頭を下げる。

やがて二人きりとなった空間で、少年は隣に座る少女の事を見てみると、其処には自然な笑みを浮かべ、母性を感じさせる少女がいた。

そんな少女の新たな魅力を発見出来た事で、少年はより少女に対する想いが強くなった事を自覚した。

その後少女と共に宮殿を散策した少年は、最後に鏡の間のバルコニーに来ていた。

其処はイツシュ地方に伝わる伝説の竜や人間とゴルーグを模した石像と共に、宮殿の広大な庭園が見渡す事が出来る人気の場所だ。

普段ならば大勢の観光客で入れないであろう此の場所だが、今は幸運にも人は少なく、少女との静かな一時を過ごせそうだ。

そんなバルコニーから眺める庭園の風景に感動していた少年だが、隣にいる少女は沈黙したまま立ち尽くしていた。

少年はバルコニーからの絶景に夢中で気付かなかつたが、少女の目は暗く濁っており、その視界にはあるはずの無いあの日旅の同期と見た花火の光景が映っていた。

少年と少女は宮殿を出て別れる事になり、少年は名残惜しそうに並木道の向こうに見

える少女の背中を見つめていた。

やがて完全に見えなくなると、少年はポケモンの鍛錬の為に六番道路脇の雑木林に入って行った。

く七番道路く とある古城 地下研究施設

道路沿いにある数多くの古城の内、ムゲン団は環境保護の名目で、数箇所古城とその周辺の土地を保有している。

しかし実際は、ムゲン団幹部である『炎獅子』が管理する研究施設として活用されていた。

此処は其の研究施設の一つであり、現在はポケモンの生命力を利用したエネルギーの研究が行われている。

そんな研究所を訪れた少女は、其処の主任研究者である男性からとある実験の報告を受けていた。

「そう…。例の物体から無限大エネルギーを取り出す事に成功したのね。」

「はい、総帥。此れにより、通常では後三年の月日が必要であった計画も、約一年程度に短縮する事が出来ました。」

「良くやったわ。貴方達は今後、其の物体からのエネルギー収集を優先する様に。私は少し出かけるから、其の間に何かあれば『炎獅子』に連絡しなさい。」

「了解致しました。気を付けて御出かけ下さい。」

少女が男性に見送られ研究所を出ると、空には星々が瞬くように輝きを放っていた。

そんな星々の中でも一際強い輝きを放つ星を見た時、少女は昼間に再会した少年の事を思い出した。

あの少年の瞳の煌きが、一等星にとても良く似ていたからだ。

其れに少年を見ていると、まるで二十五年前の自分を見ている様な錯覚に陥る。

まだ世界を美しく感じ、未来を信じていたあの頃の自分のようだ、と。

其の性なのか、最近はずでさえ悪い夢見がより悪くなってしまう様に感じる。

そんな少々寝不足気味の少女は、少年にある事を願う。

「どうか、世界を信じられますように」と。

そして、どうか少年が敵になりませんように、と。

そんな願い事をした少女が見た夜空に、流れ星は現れなかった。

第六話

く七番道路く バトルシャトー

七番道路はカロス地方ー長い道路であり、其の道中には様々な施設が存在する。

中でも、通称「バトルシャトー」と呼ばれる場所は非常に有名だ。

元々は貴族や王族が狩猟時に利用していた城であったが、現在は会員制のポケモンバトル施設として使われている。

其の場所はトレーナーにとっては一種の憧れの場所であり、其の憧れは海外に存在するポケモンバトル専用の施設にも匹敵する程だ。

其の理由として、世界的にも著名な、しかもチャンピオんクラスのトレーナーと対面する事が出来る、というのが大きな理由だ。

例を上げると、シンオウ地方の考古学者や、ハウエン地方の大企業の御曹司等の人物だ。

又其の理由以外にも、世界各地の大企業の会長や富豪の目に止まれば、ポケモントレーナーとしての地位を確立出来るから、というのもある。

しかし其処の会員になる事自体が非常に難しく、非常に高額の入会金を支払うか、各

地のジムリーダーや四天王、チャンピオンからの推薦を受けて入会試験に合格しなければ会員になる事が出来ない。

仮に会員になったとしても、今度は「爵位」という階級の壁が立ちはだかり、ある程度のポケモンバトルの腕前が伴わなければ、チャンピオン等に挑戦する事は夢の又夢である。

そんな場所である「バトルシャトー」に、宮殿で少女との逢瀬を楽しんだ少年は訪れていた。

無論入場するには会員である必要があるが、其の問題は父からの推薦状という形で解決した。

入会試験にも無事に合格し、少年は最初の爵位である「男爵」^{バロン}となる事が出来た。

其後数人の人々とバトルし、其の全てに勝利した少年の財布は非常に重くなり、少年は周囲の人々との価値観の相違に驚いていた。

少年が旅に出る時に、少年は両親からある程度の旅費は貰っているが、此処で得た金額は其れを遥かに上回る程の額だった。

此処に来る人物ともなると、大半の人は金銭的や社会的に裕福であり、又此処でのルールに、勝者に対する礼儀として最大限の敬意を払う、という項目もあり、ポケモンバトルの賞金は通常よりも高くなっている。

そんな周囲の人々の金銭感覚に少し困惑気味の少年に、一人の女性が声を掛ける。

少年が其の声に振り向くと、ムゲン団代表と書かれた名札を身に着けた、炎タイプの四天王を務めている女性が立っていた。

女性に声を掛けられた事に少年が疑問に思っていると、彼女は少年を少し見つめた後、何かに納得した様に首を振った。

そして少年に対して、少し話がしたい、と言い、テラスの方に歩いて行った。

其の後を追って少年がテラスに出ると、女性は優雅に椅子に座り、雌のカエンジシを撫でていた。

少年が対の椅子に座ると、女性はカエンジシを撫でるのを止めて少年に目を向ける。

緊張した面持ちで座る少年に、女性は少し苦笑すると直ぐに真剣な表情をし、少年に對して謝罪した。

急な謝罪に驚いた様子を見せる少年に、女性は、チャンピオンから話は聞いた、と話す。

五番道路で少年が巻き込まれたあの出来事に対し、本当のムゲン団ではないが、少年に對して迷惑を掛ける事をして済まなかった、と。

少年に對して心底済まなそうな顔して語る女性に、少年は、気にしていない、と言って励まそうとする。

そんな少年の様子に、女性は少し荷が下りた様な表情をして卓上の飲物を飲み、少年にも何か飲物を出す様に、と使用人に言つて少年の分の飲物を頼み、二人で其れを飲みながら過ごした。

そろそろ帰らないと、と呟いた女性は最後に、直接会つて謝る事が出来て良かった、と少年に言つて席を立ち、カエンジシを連れてテラスから出て行つた。

女性が行き、一人テラスに残された少年は女性が頼んだ飲物を飲みながら、ムゲン団について考えていた。

暫くして、少年が此の場所を出ようと思ひエントランスホールに来た時、其処で多くの名前が刻まれたとある銘板が目に入った。

其の銘板が気になり、少年が近くの使用人に聞いてみると、どうやら「大 グランデユーク・ダツチエス 公」の爵位を持つ人物の名前が刻まれた物らしく、少年の父親の名前もあるようだ。

世界でも一流のトレーナーの名が刻まれている其の銘板を少年が少し眺めていると、其の銘板に刻まれた一つの名前が目についた。

其の名前の人物は少年が生まれる前に失踪した元チャンピオンであり、少年の父親の同期で好敵手であつた人物だつた。

そして其の名前を見た時、少年は何故か、名前が違う筈のあの少女の事を思った。

くシヨウヨウシテイく シヨウヨウサイクル本店

シヨウヨウシテイは切り立つ崖と緩やかな海岸が存在する街で、其の地形からサイクリングでの風景を楽しむ観光が有名な程の景勝地である。

其の為、此の街では一年に一度大規模なサイクリングレースが行われ、世界からサイクリングに命を懸ける選手達が集まり活気を見せる。

そんなシヨウヨウシテイに、少年は七番道路と地つなぎの洞穴を抜け、無事に辿り着く事が出来た。

地つなぎの洞穴の出口は街の高台に位置しており、少年の目の前には夕焼けに照らされてる街並みと黄金色に煌めく大海原が見えている。

故郷では直接見る事の出来無い其の光景に、少年は旅に出た事を強く実感した。

そんな少し感傷的な気持ちになった少年だが、日が暮れる前には寝台に辿り着く為に、急いで市街地に行く坂道を下って行った。

暗くなる前に無事に寢床を確保した少年は、街中で少し気になる店を発見した。

高台からの坂道を下った先に、とある自転車販売店を見つけたのだ。

其の店の宣伝旗には「チャンピオン御用達の自転車！」と書かれたおり、店の前には件の自転車らしき物が展示されていた。

是迄の旅路で、少年は少し歩くのが億劫になりつつあったので、是非とも明日には見に行こうと決め眠りに就いた。

翌朝、旅の疲れを癒した少年は其の自転車販売店に訪れていた。

まだ朝早い時間に來た為、少年の他に客の姿は見当たらない。

少年が店内を暫し物色していると、店の奥から此の店の店主である男性が出て來た。

其の男性は少年の姿を見ると、目を瞬きしてから懐かしい人を見る様な目で少年に、いらつしやい、と声を掛ける。

其後、少年がどの自転車を買おうか迷っていると、店主である男性が少年に声を掛ける。

「君は、チャンピオンの息子さんだろう。」と。

少年が其の問いに首を縦に振ると、店主の男性は嬉しそうに少年に語り掛ける。

其の話では、少年の父親の御蔭で此の店の売上が大きく上がり、今では念願であった支店を他の街に出す事が出来る程になり、少年の父親には非常に感謝しているそうだ。

其処で御礼と言つては何だが、少年に自転車をプレゼントしよう、と話す。

店主からの思い掛けない提案に少年は断ろうとするが、店主の男性は、未来のチャンピオンへの宣伝だ、と言ひ、少年に好きな自転車を選ぶ様に促す。

其処迄の好意を見せられ、流石に其の好意を無碍にするのは出来なかつた少年は、父親と同じ車種の自転車を店主に注文した。

店主の男性は其の注文に笑顔を見せ、少年に、ジム戦が終わつた頃に取りに来る様にと云う。

少年が店主に感謝の言葉を言うと、店主は少年に応援の言葉を贈る。

其の言葉に勢い良く返事をした少年は、店を出てシヨウヨウジムに向かつた。

其れを見送る店主は、少年の背中にチャンピオンと其の同期達の面影を見ていた。

くカロスリーグく 会議室

少年がシヨウヨウジムに挑戦しようとしていた頃、息子である少年と思わぬ再会をし、其の成長した姿を見て親として満足気な表情を浮かべていた少年の父親は、リーグに戻ると真剣な表情をして会議室に向かつていた。

そんなチャンピオンが会議室に入ると、其処には四天王やリーグの運営に関わる人々が席に座って待っていた。

彼等はチャンピオンに対して一度礼をすると、既に会議の準備を整えていたのか、チャンピオンが席に就くと直ぐに会議の議題について説明する。

そして全ての議題に対し、滞り無く対応策を決定した彼等は、今後起こり得る問題に對しての協議を始めた。

「五番道路の件ですが、警察からの情報によると彼等は何者かによつて雇われた様で、トレーナーからポケモンを奪う様に命令されていた様です。肝心の雇い主については、其の雇い主については何故か覚えていない、と供述しております。恐らくはゴーストかエスパータイプのポケモンによつて記憶を改竄、若しくは消去されたと考えられます。」

「其の雇い主という何者かが、此のチャンピオンリーグを妨害しようとしている、と言うことか……。」

息子が巻き込まれた事件が、こうも陰謀臭い物になるとは考えていなかった少年の父親は、雲行きが怪しいと感じて其の雇い主について調査する様に命じる。

其の命令を受けたリーグ職員が、関係部署に電話を掛けて、調査人員の確保をしている。

同様の事件はカロス各地で起きており、実際にポケモンを奪われたという被害も出てしまっている。

二十五年前に壊滅したフレア団と同じ規模での活動に、少年の父親は動乱の雰囲気を感じていた。

そんな少年の父親は、息子の無事を祈りながら今後の指示を出す。

そんな少年の父親であるチャンピオンは、何処か遠い目をした四天王の女性の様子に気付かなかった。

会議が終わり各々が仕事に戻る中、一人会議室に残った女性は、総帥である少女にあるメールを送った。

くコウジンタウンく ムゲン団コウジン支部

コウジンタウンは水族館と化石研究で有名な場所であり、特に化石研究においては世界有数の研究所の一つである。「コウジン化石研究所」が存在する。

此処で化石研究が発達したのは複数の要因がある、一番の理由として近郊に位置する「輝きの洞窟」があげられる。

此処で化石が発掘された事で調査が進み、今では複数の種の化石が新たに発見されて

いた。

そんな化石と水族館の町である場所に存在するムゲン団のコウジン支部に、少女は訪れていた。

『炎獅子』から、リーグの陽動を兼ねた偽装工作が成功した、という連絡を受け、次なる工作の準備をする為である。

其後何事も無く人員の手配が終わった少女は、海岸に移動して今後の展開と未来を想像していた。

コウジンタウンの海岸は水族館があると言うだけの事があり、砂浜では色鮮やかな貝殻が数多く存在し、水平線が見える広大な海は透き通って見え、多数の水生ポケモン達の楽園となっている。

そんな海岸から眺める海の景色はとても美しい筈なのに、微塵も少女の心は動かさず、其の目は、透き通る水の向こうに存在する深海の様に、深い紅を覗かせる色をしていた。

第七話

くシヨウヨウジムく エントランス

ポケモンジムと一口に言っても、其の内部構造は各ポケモンジムによって大きく異なる。

特に此処カロス地方のポケモンジムは其れが顕著であり、ポケモンジムの内部デザインは世界的にも評価が高い。

其の様に構造が異なる理由として、ポケモンの生態を実体験させる、というカロスリーグの方針が影響している。

勿論挑戦者の安全を確保した上であるが、各ポケモンジムではジムリーダーの使用するポケモンのタイプを意識したチャレンジ内容となっており、少年がクリアしたハクダンジムでは、実際の虫タイプポケモンの生態を参考にした内容になっている。

そして此処、シヨウヨウジムのジムリーダーは岩タイプの使い手であり、ロッククライミングにおける著名なアスリートでもある男性だ。

岩タイプのポケモンが主に生息している険しい山岳地帯を意識したのか、岩肌から突き出た岩を頼りに崖登りをし、頂点で待っているジムリーダーの元に辿り着く、という

非常に肉体を酷使するチャレンジ内容となっている。

そして其のポケモンジムは崖を削り貫いた屋内に位置する筈だが、屋内の施設に有るまじき高さを誇る岩山が、今少年の目に写っていた。

自転車屋の店主に応援され張り切つてジムに挑戦しに来た少年だったが、目の前の岩山を見て何処か引き攀つた顔をする少年。

そんな表情をする少年に、普段は挑戦者に陽気に声を掛けるジム説明の男性も、少年に同情の視線を送る。

暫し茫然としていた少年だったが、意を決したのか、岩山に向かい一歩目を踏み出す。そんな少年に、先程同情の視線を送っていた男性も応援の声を贈る。

其の声に応えようと、少年は後ろを見る事なく岩山を登り始めた。

幾度もの崖を昇つては降り、少年は遂に山頂と呼べる場所に辿り着いた。

全身の筋肉という筋肉は悲鳴を上げていて、少年は既に疲労困憊と化しているが、山頂に登り切る事は前段階であり、此処からが本当の試練なのだ。

最後の氣力を振り絞った少年が前に目を向けると、其処には此のシヨウヨウジム最後にして最大の関門である男性が立っていた。

ジムリーダーである其の男性は岩山を踏破した少年に称賛の言葉を贈り、だからこそ全力で少年に応えようと宣言する。

其の言葉を聞いた少年は獐猛な笑みを浮かべ、静かにモンスターボールを構える。少年にとって二回目のジム戦が幕を開けた。

く輝きの洞窟く 最深部 壁画の間

現在は発光する苔と化石で知られる此の洞窟だが、考古学者の間では別の事で知られている。

其れは、古代の王達の時代から彫られていた壁画である。

嘗て此の洞窟は、苔が発光して洞窟全体が輝いて見える様子から、古代人の間では神祕の場所として扱われ、神が住む天界に通じる場所であると信じていた、とされている。

其の為古代人によって、カロスで何かしらの大きな出来事があれば此の洞窟に壁画と

いう形で記録して神に報告する、という一種の聖域として使われていたようだ。

其の壁画には狩猟や耕作、祭り等の様子が活き活きと彫られた物もあれば、地震や火災、水害等の天災の様子が恐々と彫られた物もある。

そんな壁画の中には、特に貴重な二つの壁画がある。

一つは、戦争によって愛するポケモンを失い狂乱状態になってしまったカロスの王が、水晶花の様な機械を創り上げ此のカロスを滅ぼした、とされている物。

そしてもう一つは、『魔鳥』の襲来と其れに抗う人々が、『聖獣』の力により『魔鳥』を封印する迄の過程を記した物。

其れ等の考古学的価値は測りしれず、万が一の事を考え其の壁画は一般には公開されていない。

そんな壁画の前で、少女は其の壁画を眺めていた。

其の場所に着く迄に多少の障害はあったが、少女にとっては大した物では無かった。

少女は『最終兵器』について彫られた物と、自身が片割れを保有する『聖獣』と『魔鳥』について彫られた物を其の目で確認するが、少し落胆して溜息を吐く。

何かに収穫は無いかと思ひ此処に来たが、想像した様な成果を得られ無かった事に少女は舌打ちし、苛ついた様子で此の場を去って行った。

そんな苔で光輝く洞窟には、此処の警備員であろう数人の警備員と其のポケモン達が目虚ろにして立ち、少女が洞窟から出て行くと、彼等は何事も無かったかの様に仕事をし始めた。

不思議な事に誰一人として少女の事は覚えておらず、少女が壁画を見ていた時間の記憶についても、彼等は何も起きていないと認識していた。

くシヨウヨウジムく バトルコート

山頂での激戦を制したのは、少年の方だった。

限界の疲労の御蔭なのか、一種の覚醒状態に入った少年はバトル中に凄まじい成長を見せ、見事ジムリーダーである男性に勝利する事が出来た。

無論少年だけで無く、彼のポケモン達の成長もあつてこそその勝利だ。

少年が殻を脱いだポケモンバトルが終わり、段々と少年の意識が明確になってくると、対戦相手であるジムリーダーの男性は悔しそうだが清々しい表情していた。

其後少年は、目の前の男性に勝利した証としてウォールバッジを受け取り、男性は少

年に話し掛ける。

「君ならば、本当にチャンピオンを超えられるかもしれない。」と。

其の言葉に少年は、かもしれないでは無く、超えるのだ、と話す。

少年の言葉に目を瞬かせると、男性は朗らかに笑い、自分も歳を重ねたかもしれない、と呟く。

其後少年がジムのエントランスに戻ろうとした時、男性は最後に、次は本気の相棒達とバトルしよう、と少年に約束を持ち掛ける。

少年を自身と同等の相手として認める其の再戦の約束に、少年は男性に手を差し出して応える。

少年の其の返事に、男性は差し出された手に自分の手を合わせて強く握り、少年に、頑張れよ、と声を掛ける。

少年も強く握り返し、頑張ります、と返事をする。

そうしてポケモンジムから出て行く少年の背中には、在りし日の少年の父親の姿が映って見えた。

く八番道路く 海岸側道路

八番道路を通りコウジンタウンに向かうには、主に二つのルートが存在する。

一つ目は、地つなぎの洞穴からコウジンタウンへと向かう崖上側ルートであり、此方からでは崖からの絶景を楽しむ事が出来る。

二つ目は、シヨウヨウシテイからコウジン水族館を通ってコウジンタウンへと入る海岸側ルートであり、此方では生命溢れる海を身近に感じる事が出来る。

そして釣竿を所持していれば、常識の範囲内でポケモンを釣って捕まえる事が出来る。

そんな二つのルートに別れる道路を、少年は海岸側道路に沿ってコウジンタウンに向っていた。

カロスリーグに挑戦するだけならば、正直コウジンタウンに向かう必要は無いのだが、少年はとある物を目にする為に寄り道する事にしたのだ。

少年が是非とも見たい物、其れは化石だ。

少年だつて男の子であり、古代の浪漫が詰まっている化石には年相応の興味がある。

其れに、シヨウヨウジムのジムリーダーが使っていたポケモン達は化石から復元した

ポケモンだそうで、生きた実物を目にした事が今回の決断を後押ししたのだ。

そんな少年が、崖と砂浜が対称的な美しさを醸し出す道を進んでいると、何故か周囲に人の気配を感じない。

確かに夜間では、余程の物好きか何か目的がある人位しか野外に出ないとはいえ、今は日中であり誰一人として姿が見えないのは異常である。

其の事に疑問を感じた少年が周囲を探索していると、突如少年の背後から声を掛けられる。

其の声に驚き、少年が警戒しながら声のした方へ振り向くと、其処には巨人の様な体軀をして珍しいフラエツテを連れた白髪の男性が立っていた。

男性は少年を見ると一瞬目を見開き、其後何かを呟くと、少年に、此処から急いで去る様に、と促す。

少年が男性の言葉に質問しようとする、何やら別の声が聞こえてくる。
其の声に耳を傾けると、どうやらある人物を探している様子だった。

少年が少し声の方向を覗いて見ると、其処にはムゲン団の制服を着た二人組が彼方此方を探索していた。

聴て其の二人組は辺りを探索し終えたのか、少年と男性が隠れている岩場に近付いて来た。

段々と近付いて来る彼等に、少年がどうしようか迷っていると、男性は少年にポケモンを準備する様にと指示を出す。

其の男性の言葉に少年が聞き返そうとすると、ムゲン団の制服を着た二人組は白髪の男性の事を見付けた様で、ポケモンを繰り出して攻撃を始めた。

こうなつては仕方が無いとして、少年は隣にいる巨人の様な男性とタッグを組み、自身のポケモンを繰り出した。

男性を探していた二人組を少年達が追い払うと、二人組は三流の悪役の様な科白を言い残して去って行った。

少年は男性に、何故追われていたのか、と質問すると、男性は首を横に振り、其れは言えない、と答える。

其の答えに怪しさを感じた少年は、急いで男性から離れようすると、男性は少年に警告する。

「此の世界は、滅びを迎えようとしている。」と。

男性から離れようとして背を向けていた少年は、其の一言の真意を尋ねようと男性がいるの方を向くと、其処に男性の姿は見えず、まるで蜃気楼の様に消えていた。

「コウジンタウン」ムゲン団コウジン支部

壁画のある「輝きの洞窟」から帰つて来た少女は、とある搜索班から緊急の連絡を受けていた。

「それで、緊急の連絡は何かしら。私は今、虫の居所が悪いのだけでも。」

「申し訳御座いませぬ、総帥。『愚者』搜索班からの報告によると、此処コウジンタウンで目標を発見するも逃走を許し、其後八番道路での搜索にて再び発見したが、其の場に居合わせた少年と目標の抵抗に合い確保に失敗。よつて目標は現在も逃亡中であり、搜索を続行中である、との事です。」

「そう…。ならば搜索班の人員を増やし、二十四時間体制で搜索に挑めと伝えなさい。其れと、私を余り失望させない様に…。ともね。」

「了解致しました。必ずや発見する様に伝えます。」

少女の不機嫌を感じ取つたのか、少し顔を青くしながら、報告を済ませた団員は部屋

から足早に退出する。

先程の団員の様子から自身の苛立ちを自覚した少女は何度か深呼吸をすると、少女は自身の切り札であるポケモンが入ったモンスターボールを撫でる。

其の優しい仕事とは逆に、少女の心は激しい怒りが支配していた。

『何故こんな世界を守ろうとして、私の邪魔をするのか。』という。

そんな少女の憤怒は少女の周囲を黒く染める程であり、少女の煌々と燃えている瞳だけが、唯一怪しく輝いて見えた。

第八話

くコウジンタウンく コウジン化石研究所

「コウジン化石研究所」は「コウジン水族館」と並び、此処コウジンタウンの発展に大きく影響している場所だ。

此の研究所では数十年前に「輝きの洞窟」にて発見された顎の化石と鱗の化石の復元に成功し、チゴラスとアマルスという新種のポケモンを此の世に蘇らせた事で一躍世界的に有名になった。

又、他にも「輝きの洞窟」で発掘される化石は非常に保存状態が良く、化石と化したポケモンを完璧に近い状態で復元する事が出来、其れにより詳しい化石ポケモンの生息を明らかにした事も、此の研究所の名声が高まった要因の一つだろう。

何処かの地方とは違い、化石の身体の一部が欠けている様な事や、明らかに無理がある化石同士を組合せて復元し、肉体の断面が見えたり呼吸困難な両棲類を生み出す様な事は無かった。

そして其の研究所では、一般人向けに「輝きの洞窟」にて発掘された様々な化石を展示している。

又通常の化石展示以外にも、子供達の化石への興味を持つてもらおう為に復元したポケモン達との交流会が開催されており、対象であった子供達以外に保護者である大人からも人気を博している。

他にも、盾の化石や甲羅の化石等々のポケモンの化石のレプリカが併設された売店にて販売されており、其の再現度から観光客に大変人気の御土産となっている。

そんな研究所から出て来た少年は、大変幸せそうな表情をしていた。

今迄は図鑑やテレビ等でしか見る事が出来なかった化石を間近で見れて、少年はまるで幼い子供の様に興奮した様子だった。

そして折角なので、少年は化石の発掘現場である「輝きの洞窟」に行ってみる事にした。

少年の旅の予定には無かったが、元々予定は余裕を持たせてあり、此の様な観光をしなくても計画に支障は無い。

最低でもリーグの開催前迄にバツジを八つ手に入れ、リーグ会場で選手登録をすれば良いのだから、全て間に合えば良からうなのだ。

早速少年が「輝きの洞窟」へと続く九番道路へ向かおうとすると、ムゲン団のTシャツを身に着けた怪しい一団が其の方向へと進んで行ったの目撃した。

其の集団に、少年は何か邪な思惑を感じ取り、急いで其の集団を追い駆ける事にした。

く九番道路く サイホーン乗り場

兀兀とした地面によつて生身の人間が歩く事が困難な地形となつている此の道路は、交通の為にサイホーンが使われる事で有名だ。

人間にとつては脅威となる此の地形だが、サイホーンにとつては気持ちの良い物らしく、よく乗り手が居ない時も歩き回っている様子が見られるようだ。

其の時の様子を人間風に例えるならば、足つぼのマツサージ板の上を歩く事になるのだろうか。

そんなサイホーンだが、少年にとつては思い出深いポケモンだ。

少年の家の近所にはサイホーンを飼育している御婆さんがおり、其の家のサイホーンは少年にとつても良く懐いていたからだ。

少年の祖父母と両親と交流がある其の家のサイホーンは、其の経歴故か余り人に懐かない事で知られていた。

御婆さん曰く、乗り手として相応しい人物にしか懐かない、との事だ。

だが少年が両親と共に其の御婆さんの家に訪れた時、其のサイホーンは少年に何かし

らの才能を感じたのか、突然幼かった少年の前に歩き出して自慢の角に触らせたのだ。

其のサイホーンの様子に両親と御婆さんは大変驚いていたが、楽しそうにする少年とサイホーンを見て微笑ましい物に変わった。

其後も、少年が御婆さんの家に訪れる度に、サイホーンは少年に構えと言わんばかりに頭を押し付け、彼等は信頼を高めていった。

少年が旅に出る直前に、出発の報告の為に御婆さんの家に行き、報告が終わって家から出る時に其のサイホーンと目が合った。

少年の目から思いと決意を感じたのか、サイホーンは少し寂しそうにしながらも、何処か嬉しそうに鳴き声を上げて眠り始めた。

少年が最後に角を撫でた時、其のサイホーンの目には少年では無い別の誰かも映っている様に見えた。

少年が暫しの間思い出に浸っていると、サイホーン乗り場の職員が、サイホーンの準備が出来た、と少年に声を掛けられる。

其の言葉で自分の目的を思い出した少年は、其の職員が準備したサイホーンへと駆け寄り。

用意されたサイホーンと少年の故郷のサイホーンを比較していると、目の前のサイ

ホーンは少年の事が気に入ったのか、嬉しげな鳴き声を上げて少年に頭を押し付ける。故郷のサイホーンと同じ仕草を見せるサイホーンに、少年は笑顔で角を撫でてサイホーンの背中に跨がる。

すると、サイホーンは楽しそうな鳴き声を上げながら、「輝きの洞窟」へ向けて全速力で走り出した。

道中で凄まじい砂埃を巻き起こしながら去って行くサイホーンと少年を、乗り場の職員は只唾然として見ていた。

く輝きの洞窟く 化石発掘現場

サイホーンでの峠攻めの様な爆走を楽しんだ少年は、あの怪しい集団を追って「輝きの洞窟」へと来ていた。

本来の観光とは別の目的になってしまったが、あの集団の目的を知った後に確りと観光しようと、少年は心に決めた。

そんな少年が洞窟内で怪しい集団を探していると、数人の男性が倒れているのが見えた。

少年が急いで倒れている男性に話し掛けると、彼等は此処の警備員であり、少年が追っていたムゲン団のTシャツを身に着けた一団に倒されてしまったらしい。

少年が男性達を介抱すると、気が付いた男性は、少年にあの集団を追う様にと頼んだ。話を聞くと、此処から先は化石の発掘現場であり、其処には数人の化石研究者しか居らず、彼等が危険な目に合う前に救助して欲しい、との事だ。

少年が男性の要望に頷くと、彼等は一度洞窟の入口に戻り、警察に連絡してから再び此処に戻つて来るらしい。

其の為、彼等は少年に、無理をしない様に、と告げて入口の方へ歩いて行つた。

此の先にいる筈の人達の安全確保の為に進む決意をした少年は、苔で光輝く洞窟の先へと歩いて行つた。

少年が化石発掘現場へと続く貨車の線路に沿って歩いて行くと、突き当りで何者かの影が動いているのが見えた。

少年が近くの岩場に隠れ、息を潜めて影の様子を伺っていると、二人組らしい影の話し声が聞こえてくる。

どうやらあの怪しい集団は、此処で奪った化石を売り捌く事で大金を手に入れようと

しているらしい。

化石を冒瀆する様な理由で此処を襲撃した集団に、少年はつい二人組の前に出てしまったが、其の二人組は少年の存在に非常に驚き、慌てながらポケモンを繰り出す。

報連相も出来ていない彼等に、少年もポケモンを繰り出して応戦した。

其後、化石発掘現場を襲撃したムゲン団のTシャツを着た集団は少年に全て倒され、後から駆けつけた警備員と警察によって連行されていった。

そして少年は其の場に残った研究者達に感謝され、発掘したてであった二つ化石の内の片方を、御礼としてプレゼントされた。

憧れである本物の化石を手にした少年は、其の重量感と質感に感動して、興奮した面持ちで洞窟から去って行った。

無論帰り道も、少年を待っていたサイホーンによる頭文字が付きそうな速度の走りであつた。

くコウジンタウンく コウジン水族館

此処「コウジン水族館」はカロス地方を代表する水族館であり、世界各地に生息する多種多様な水生ポケモンが展示されている。

そして此の水族館では「コウジン化石研究所」との提携で、水生化石ポケモンの展示を行っている事で有名だ。

そして、化石の観光や洞窟での襲撃事件を終えた少年は、そろそろ此の町を去って次のポケモンジムがあるシヤラシテイに向かおうと、町の出口を兼ねている「コウジン水族館」に来ていた。

受付でトレーナーカードを見せて中に入ると、少年の視界に蒼く映る大きな水槽が鎮座していた。

コウジンタウンに入る際にも見ていたが、水槽で生き活きと泳ぐポケモン達はとても惹かれる光景であり、やはり少年も例に漏れずに魅入ってしまった。

少年が水槽を見て立ち止まっていると、少年の背後から聞いた事のある声が掛けられる。

其の聞いた事のある声の人物に対して振り変えると、其処にはあの少女がいた。

少女は少年によく会う事に驚きながら、少年に、今は何をしているのか、と尋ねる。気になる少女を前にした少年は少し緊張しながら、水槽で泳ぐポケモン達を見ていた、と答える。

其の答えを聞いた少女は少し考え事して、少年に対して、一緒に観光しよう、と話す。此の思い掛けない展開に、少年の頭は湯気を上げながら肯定した。

すると少女は悪戯が成功した様な表情を浮かべ、少年の手を握り歩き出す。

少年は少女の手の感触の柔らかさを感じ、自身の手汗を心配しながら、少女に付いて行った。

少年が少女との観光に少し慣れてきた頃、少女は水槽に目を向けたまま、少年にある質問を問い掛ける。

「今水槽の中で泳いでいるポケモン達は、今本当に幸福と感じているのかしら？」と。少年は其の質問に少し悩むと、少女に対して自分の考えを述べた。

其の少年の答えを聞いて、少女は只一言を呟いた。

「そう…。其れが貴方の答えなのね…。」

何か気に触る事を言ったかと心配した少年だが、少女は直ぐに少年の手を引っ張り、

其の場から歩き出してしまったので、少年は付いて行く事しか出来なかつた。

其後少女と少年は其のまま観光を続け、水族館の出口である黄金のコイキング像の前で別れる事になった。

此の黄金のコイキング像は釣り人にとつての御神体らしく、普段は大漁祈願や大物のポケモンを釣る前に釣り人が参拝しに来るのだが、今はそんな時期では無いらしく人は疎らだった。

少年は、少女とのデートとも呼べぬ水族館観光に意気消沈していると、少女はそんな様子を見せる少年に苦笑し、最後に二人で何かしよう、と提案する。

其の言葉を聞いた少年は、大分悩ましげな表情して考えていると、少女との写真を撮りたい、と言いつ出した。

写真に写る事に抵抗を示した少女だったが、少年の棄てられた子犬の様な表情を見て、溜息を吐きながら了承する。

少年は周囲の人に写真機を渡し、少女と黄金のコイキング像の前に並んだ写真を撮ってもらつた。

少年は別れ際に其の写真のデータを少女にも渡して、自身はシャラシテイに向けて旅

立って行つた。

渡された其の写真には、緊張しながらも嬉しそうに笑う少年と、何処か困つた様な表情をして不器用な微笑みを浮かべる少女が写つていた。

くミアレシテイ く ムゲン団本部

少年との別れ際に写真のデータを受け取つた後、少女ムゲン団の本部に戻り、何処か悲しげな表情をして其の写真を眺めていた。

団員からの報告にあつた少年が、写真に写る彼だと知つてしまったからだ。

少女があの時願つた微かな願いすらも、此の世界は叶えるつもりが無いらしい。

本当は敵対したく等無いが、少年が自身の目的の障害になるのなら、少女は排除するしかない。

運命とは、何故こうも皮肉で残酷な物なのだろうか。

そんな事を思った少女は、窓硝子の遠い向こうに居るであろう少年の事を考え、深い溜息をついた。

第九話

世界には様々な英雄譚が存在するが、大抵の英雄譚は世界に平穩を齎したと語られ、歴史書には其の英雄の名と功績が記されている。

勿論此のカロス地方にもとある王の英雄譚が遺されており、其の物語が記された石版には古代語でこう書かれている。

『今は昔、カロスは戦乱が絶えない土地であった。』

『此の地の王達はカロスを支配しようと数百年にも渡り相争い、其の為に数多の人々とポケモン達が犠牲となった。』

『美しい都市や森があつた大地は戦火によつて焼かれ、穏やかで豊かだつた大海は荒れ狂う波と死の嵐で溢れ、光が優しく照らしていた大空は灰を振り撒く乱雲によつて閉じ込められた。』

『だが、ある一人の王によつてカロスは統一され、人々とポケモン達は平和を取り戻したのだつた。』

『人々とポケモンは其の王を『大帝』と敬い、其の名と功績は永遠と語り継がれるであらう……。』

カロス地方で育った人ならば誰もが聞いた事のある物語の一説だが、此の英雄譚で語られる『大帝』の名前は一切記されていない。

残されている歴史書には『大帝』と書かれているだけで、其の人物の功績は記されているが、其の名はまるで禁忌であるかの様に空白となっている。

しかし『大帝』の弟が記録し、其の子孫が所有していた書物には彼の『大帝』の名が記されていたらしいが、其の子孫と共に行方不明となつてしまい、『大帝』の真名は不明のままだ。

因みに其の『大帝』は、海の向こうに存在しているハウエン地方のある街に苗木を贈つた、と記録に残されている。

そして他にも『大帝』絡みの気になる物語は存在するが、其れは何れ語るとしよう
 …。

く十番道路く 石柱群

此処は古代の石柱群で有名であり、其れを目当てとした観光も盛んな程だ。

そんな謎に包まれていた石柱群だが、現在ではある程度であるが石柱群の正体が判明

している。

嘗ての石柱はあの『最終兵器』の動力端末である事が、フレア団から押収された研究資料によって判明したからだ。

あの石柱群はセキタイタウンに存在する『最終兵器』を中心として、まるで螺旋を描くかの配置されており、石柱にポケモンを貼付けると、其のポケモンの生命力が『最終兵器』のエネルギーとして送られるという危険な代物であった。

だが、リーグ側の判断により一部の関係者のみに詳細が伝えられ、一般市民には其の情報は伏せられた。

そんな石柱群がある十番道路に、少年はシャラシティを目指して自転車を漕いで進んで行た。

シヨウヨウシティを出立する前に自転車屋の店主から受け取った此の自転車は大変高性能で、聞けば店一番の上物との事だった。

自転車屋の店主に感謝しつつ、少年は此処十番道路の風景を眺めていた。

古代から聳え立つ見渡す限りの巨石の群れは圧巻の一言であり、少年が余り関心の無かった歴史についても少しだけ興味が湧いてくる。

少年が道路脇に延々と並ぶ石柱を眺めながら走っていると、何処からか揉めている声が聞こえてくる。

其の声が聞こえる場所に少年が来てみると、研究者らしい白衣を纏っている女性とムゲン団のTシャツを身に着けた男性が言い争っていた。

少年を見付けた女性が少年に助けを求めると、男性は睨みつける様に少年と女性に目を向け、発掘した石版を渡せ、と女性に怒鳴る。

身を竦ませた女性を庇う様に前に出た少年を見て、男性は面倒臭そうな表情をしながらポケモンを繰り出す。

背後に庇った女性が不安そうに少年を見ると、少年は女性に安心させる様な笑みを浮かべて、男性に応じてモンスターボールに手に持つ。

何かと少年に因縁があるムゲン団らしき人とのバトルが、また始まったのだ。

少年が男性とのバトルにバトルに勝利すると、男性は悲鳴を上げて慌てながら去って行った。

男性が去った事に少年が庵著していると、女性は少年に感謝の言葉を述べながら何度も頭を下げる。

感謝もそこそこに、少年は女性に、何をしていたのか、と質問すると、依頼を受けて

此処を調査していた、と女性はある。

聞けば、ポケモンリーグからの依頼で石柱群の調査をしていたら偶然にも物珍しげな石版を発見したらしく、持ち帰って調べようとしたら其の石版に目に付けた男性に追われ、其の男性に遂に追い付かれた所だった、と言う。

其の言葉に、少年は女性が持つ石版に目を向けると、女性は其の石版を大事そうに抱え込み、少年にセキタイタウン迄護衛して欲しいと話す。

どうやら先程の様な事を考えいるらしく、少年が其の要望に対して頷くと、女性は道中の暇潰しとして少年に此の地の考察を語り始める。

女性の其の考察に、少年は古代の神秘に対する好奇心に溢れた眼差しをして、女性の話時々相槌を打ちながら聞き浸る。

くセキタイタウンく 十番道路口付近

夕暮れ時に少年と女性がセキタイタウンに辿り着くと、女性の事を探していたのか、女性と同様に白衣を纏った男性が声を上げて此方に駆け寄つて来る。

一瞬何事かと思つた少年だが、少年の隣で手を振って返事している女性の様子から、どうやら女性の知り合いらしき人だという事が分かる。

少年達の前で立ち止まった男性は、女性からの話で状況を把握したのか、少年に改めて感謝の言葉を述べた。

そして、男性は御礼としてポケットから一枚のチケットを取り出すと、少年に其れを差し出す。

男性によると、其のチケットはセキタイタウンに存在する資料館の入場券だそうで、女性が発見した石版も其処で展示される予定らしい。

石版を守ってくれた御礼だと話す男性に、女性は強く頷く。

そんな二人の気持ちに答え、少年は御礼をしながら其のチケットを受取る。

少年がチケットを受け取った事を確かめた二人は、笑顔を浮かべて少年に別れの挨拶をすると、石版について楽しみに話しながら去って行く。

研究者達が見えなくなると、少年は受け取ったチケットを大切に鞆にしまい、道中で体力を消耗したポケモン達を回復させる為にポケモンセンターに向かった。

次の日、自転車の御蔭でそれ程溜まっていないうる疲れを癒した少年は、御礼の品であるチケットの資料館に訪れてみる事にした。

資料館へと向かう途中、町の中心部に大きなドームが建っていたのが気になった少年

が近所の住民に尋ねると、遺跡の大穴の保存施設兼研究所だ、と話す。

其の住民の話によると、どうやら二十五年前に遺跡が陥没して出来た大穴の調査と研究がポケモンリーグ本部主導でされているようで、一般人は立入禁止の区域となっているらしい。

大穴というのを見たがる少年だが、立入禁止と聞いて素直に諦める。

其後、時計を見て時間の経過に驚く少年は、話をしてくれた住民に御礼の言葉をして資料館に走って行った。

そんな少年を手を振って見送った住民は家に戻り、壁に飾られている当時のセキタイタウンの写真に写る昔の実家に郷愁を感じていた。

ドームについて話を聞いた少年は「セキタイタウン資料館」と記された建物に着いた。少年が受付にチケットを渡して入場すると、中には数多くの写真と解説文が書かれたボードが並んでいた。

内容に関しては、セキタイタウンを取り巻く様に存在する石柱に關しての資料と写真が大半だったが、古代に使われたとされる武器や装身具、食器や壺等の陶磁器も展示されている。

少年が其れ等の展示品を見ていると、昨日の女性が発見したらしい石版が既に展示されていた。

研究者達が徹夜で古代語を解読したのか、其の石版の文章の意味が翻訳された解説板が置かれている。

其の解説板によると、石版にはこう書かれているらしい。

『此のカロスに平和を齎した『大帝』は、彼の愛するポケモンと穏やかな時を過ごした。』

『人々とポケモンは共に助け合い、『大帝』の治世の下に平和を謳歌した。』

『然し、其の平穩は長くは続かず、カロスは再び戦の嵐が吹き荒れた。』

『戦乱により数多の人々とポケモンが死に、遂には『大帝』の愛するポケモン迄もが戦で亡くなった。』

『愛するポケモンを失い悲嘆に暮れた『大帝』は禁忌を犯し、『命を与える機械』を創り出した。』

『機械によつて蘇ったポケモンは『大帝』の犯した過ちに悲しみ、『大帝』の前から姿を眩ませた。』

『愛するポケモンから見限られた『大帝』は狂乱し、『命を与える機械』を『最終兵器』に改造して、此の世界を滅ぼした。』

『彼の『大帝』は『破壊神』と成り、最早人では無く怪物へと成り果てた。』

『今後、彼の人物の名は忌むべき物として、全ての記録に書き記す事を禁ずる。』

『どうやら此の石版は、カロスでは有名な『大帝』の英雄譚の其後を記した物であったらしい。』

続く解説文には「此の石版は大変貴重であり、是迄の『大帝』に対する常識を覆す歴史的な遺品だ。」と締め括られている。

幼い頃に見聞きした御伽話の英雄の悲しい結末に少年は感傷的な気持ちになるが、自身が守った品の価値に対する驚愕の気持ちの方が大きかった。

其後、資料館を一通り巡った少年はポケモンセンターに戻る事にした。

少年が外に出る頃には日が暮れており、夕焼けに照らされた巨石の数々が更に大きく見えた。

そんな石柱群を見た時、何故か少年は哀しい気持ちになった気がした。

くセキタイタウンく 郊外 遺跡跡

二十五年前、此処セキタイタウンの地下にはフレア団の秘密基地が存在した。

結果として『最終兵器』の暴発によつて其の基地が崩落した事で、彼等の研究と目的は地下に埋もれてしまい、彼等の研究成果は殆ど分かつていない。

そして秘密基地には複数の出入り口があり、フレア団にしか知られていない場所という物が存在する。

そんな地元の住民ですら寄り付かない場所に存在する出入り口に、一人の少女が訪れていた。

今は夜であり、通常ならば警官に呼び止められる様な時間だが、こんな辺鄙な場所を見回る様な警官はいなかった。

夜空から月光が照らす中、遺跡に見える様に巧妙に偽装された出入り口の鍵を開け、少女は中に入つて行く。

『最終兵器』の爆発と二十五年の歳月を重ねた内部は大分崩壊していたが、少女は二体のポケモンを出して、片方には灯りを灯させ、もう片方には障害物の掃除をさせると、奥に向けて歩き出す。

廳で少女はとある部屋の前に辿り着き、既に動かない扉を壊して入ると、其処には一つの結晶が保管されていた。

其の結晶は仄かな光を放ちながら、空中で静かに佇んでいる。

少女は其の結晶を丁寧に鞆の中に仕舞うと、直ぐに其の場を立ち去つて行く。

少女が去った部屋には、『遺伝子結晶について』と題名が書かれている資料だけが、無惨に床に遺されていた。

第十話

〔十一番道路〕 『水晶』群

十一番道路はカロスでも比較的短い道路だが、続く「映し身の洞窟」と共に摩訶不思議な物体が多数存在している事で知られている。

其の物体とは、道端に地面から突き出ている水晶の事だ。

抑々の話として、水晶とは二酸化珪素が結晶化した物であり、其の中でも特に透明度が高い物の事を指す。

主成分である二酸化珪素は地中深くのマグマに含まれており、其れが地表に溢れ出て溶岩となる時に水分と共に放出される。

そして其れが岩石の破れ目や空洞で冷却される事で、初めて水晶として現出する。

此等が大まかな水晶の出来方だが、此処に点在する水晶は主に二つの点で違う。一つ目の点は、水晶を構成する成分だ。

本来ならば二酸化珪素が主成分なのだが、此処の水晶は未知の物質で構成されているらしく、最近の研究では此の水晶は高密度のエネルギー結晶体であるという事が判明している。

然しながら其のエネルギーの正体は解らず、研究者の間で意見が別れている。

二つ目の点は、其の地理条件だ。

先程述べた通り水晶は岩石の破れ目や空洞で冷却されて現出するが、其れには長い時が必要だ。

だが此処の水晶は其の条件に合う場所が無く、地面から急速に突き出た構造をしている。

まるで何かの出来事によって、其処に突然発生したかの様だ。

一つ目の点から、本来ならば『水晶』では無く『結晶』と言うべきなのだが、少しややこしいので『水晶』と続けておく。

兎に角、どうやら此処の『水晶』は普通の水晶とは違い、彼の有名なヒヤッコクシテイの『日時計』と同じく未知の物体の様なのだ。

因みに、ヒヤッコクシテイの『日時計』はポケモンの生命エネルギーで出来ている、と言う説もあるが、ポケモン保護団体等の反対もあり調査は進まず、其の真相は不明のままだ。

そんな摩訶不思議な水晶が点在する十一番道路に、少年はシャラシテイに向かう為

来ていた。

セキタイタウンから少し離れた郊外迄は石柱が並び立っていたが、其の石柱群を抜けると、今度は水晶柱が輝きを放ちながら存在していた。

少年は化石とは違う神秘を暫しの間眺めていたが、旅の目的を思い出して直ぐに足を進ませる。

幾ら日数的に余裕が有るとはいえ、旅は早いに越したことは無いのだ。

少年がシヤラシテイに通じる「映し身の洞窟」に向かっていると、ムゲン団のTシャツを着た男性が水晶の前で円匙を片手に立っていた。

比較的小さい水晶を掘り出そうして悪戦苦闘しているが、此処の水晶は掘り出し禁止となっている。

少年が其の男性を止めようと声を掛けると、少年が見ている事に気付いた男性は、露骨に顔を顰めてモンスターボールを手取る。

最近は何かと縁があるムゲン団とのポケモンバトルが勃発した。

少年とのポケモンバトルに負けると、男性は不格好な捨て台詞を吐きながら走り去つ

て行く。

水晶を守った少年は近くを巡回していた監視員に男性の事を報告してから、再びシャラシテイを目指して進み始めた。

其後は特に何事も無く、少年は複数人のトレーナーとのバトルやサイクリングを楽しんだ。

然し、遠くから彼を見つめる数々の影の視線には、少年は気づいていなかった…。

く映し身の洞窟く 冥界の祭壇

古代において神聖とされた物は複数あるが、其の一つに鏡がある。

鏡には特別な力が宿り、境界の象徴として異界に通じる物とされていた。

其の為、自然が生み出した鏡が存在する此の洞窟は古代人には冥界へと繋がる場所と信じられ、洞窟深くには祭壇が建てられた。

前に「輝きの洞窟」の話をしたが、其処とは真逆の意味を持つ場所だ。

此処は鎮魂と慰霊の儀を行う場であり、だからこそ彼の『大帝』も此の地に近いあの

場所を『最終兵器』の場に残ったのかもしれない。

だが現在では、其の祭壇は埋もれてしまったのか定かでは無いが祭壇が確認されていない為、其の様な事は存在しないとされている。

然し、旅行者の体験した都市伝説として其の祭壇の存在は有名であり、TV番組の特集や考古学の論文も出る程には信じられている。

そんな洞窟で、少年は今なんと迷子になってしまった。

少年が迷い込んだ場所には、年季が経っている石造りの祭壇らしき物と其の祭壇に置かれた巨大な黒耀石の鏡、そして祭壇の周囲には古代語で文章が彫られた数多くの石版があった。

何故少年が此の洞窟で迷子になってしまったのか、少し時間を遡ってみるとしよう
…。

「映し身の洞窟」は世界にも類を見ない程に珍しい場所であり、カロスでは有名な旅行雑誌「カロスの絶景百選（ミアレ出版編集）」にも取り上げられている。

勿論の事、少年も此の場所を旅の楽しみとして興奮していた。

煌々と輝きを放つ水晶と氷の様に透き通った鏡が織り成す洞窟の光景は、まさに大自
然の神秘としか言い様が無く、何時の時代も人々を魅了して止まない。

少年が其の神秘的な光景を眺めていると、鏡と化した岩石に人型の不審な影法師が
写っていた。

そして鏡面に写る其の影は独りでに動き出し、洞窟の奥へと少年を誘う様に消え去つ
てしまう。

其の超常的な出来事に少年は驚きから一度目を擦り、もう一度目を凝らす様に動き出
した影を観察すると、急ぎ足で影が見えなくなつた場所へと向かう。

影が消えた場所に少年が辿り着くと、其処から見える鏡に其の影が漂っていたかと思
えば、また直ぐに奥へと消え去つて行く。

流石に追い駆けている影の正体に気付いた少年は、トレーナーズスクールで学んだ
ゴーストタイプの対処法を思い出しながら、其の影を慎重に追い駆ける。

怪しい影を追い続ける事約一時間、少年は今いる所に来てしまった。

此の祭壇らしき場所迄影を追い駆けて此の場所に着いたのは良いのだが、其の影は何処にも見当たらない。

そんな少年が周囲を観察すると、やはり祭壇に鎮座している巨大な漆黒の鏡が目が向く。

其の鏡をよく観察してみると鏡には精巧な装飾の溝が彫られていて、過去に何かと打つかったのか数本の大きな罅割れがある。

少年が鏡を調べようと一步踏み出した其時、其の鏡面の罅割れの隙間に複数の紅い目玉が浮かび上がり、驚いて立ち止まる少年に視線を向ける。

すると光を宿した少年の目は虚ろと成り、まるで操り人形の様につくりと漆黒の鏡へ近付いて行く。

自我の無い少年の手が其の鏡に触れそうになった瞬間、少年の後ろから静止の大声が聞こえた。

「英雄主人の子よ、其の鏡に触れるな!!」

鏡に触れかけていた少年が其の声に気付き、少年の目に光が戻る。

正気に戻った少年が声のした方向に振り向くと、其処には八番道路の海岸で出会った男性が立っていた。

そして其の男性の傍らにはあの珍しいフラエツテ以外に、手持ちポケモンらしいゴ

ルーグとシンボラー、コータスもいた。

白髪で巨体の男性は少年に駆け寄ると、何をしようとしていたのか、と少年に尋ねる。少年は洞窟で見た影を追い駆けて此の場所に着いた事を話し、あの鏡を調べようとしたら鏡面に紅い瞳が浮び出た、と男性に話す。

少年が鏡を指さそうとして件の鏡が置いてあつた祭壇の方向に振り変えると、其処には古めかしい祭壇があるだけである。巨大な黒耀石の鏡は影も形も無くなっている。

先程迄確かに存在していた筈の不思議な鏡に少年は恐怖と驚きを感じて茫然とし、少年の気持ちを感じた白髪の男性は、洞窟から一緒に出よう、と少年に話す。

少年は男性の氣遣いに感謝を述べると、二人は急いで此の場所から離れる事にした。

少年が去り際に此の祭壇らしき場所を振り返つた時、何故か居る筈の無い数多くのポケモンが隣の白髪の男性を見つめている様に感じた。

其後、夕方には無事に少年は男性と共にシャラシテイ側の洞窟の出口に辿り着く事が

出来た。

命の危機から脱した少年は男性に御礼を言い、恩人である男性に何か物品を渡そうとするが、男性は一向に受け取ろうとしない。

男性の様子から少年が御礼の品を渡すのを諦めると、男性は少年に御礼の代わりにして欲しい事があると言う。

「英雄主人公の子よ、此の世界通ちを繰り返させるなを救ってくれ。」

真面目な視線で少年を見つめる男性に、少年は前回の出会いの時に聞きそびれた事を質問する。

世界の破滅とは何か、そして世界を救うとはどのような事なのか、と少年は男性に尋ねた。

其の質問に男性は少し考える様な仕草をして、少年に口を開こうとした其時、何処からか声が聞こえてくる。

少年が耳を澄まして其の声を聞いてみると其の声の主は複数人らしく、どうやらある人物を探しているらしい。

声をあげる人物達に何かを感じたらしい白髪の男性は、再び会う時に話す、と少年に告げて一瞬で消え去ってしまった。

男性の突然の別れに少年は啞然としながらも、少年も自身の旅の目的の為にポケモン

センターに向かった。

「シャラシテイ」 ポケモンジム前

カロス地方には数多くの観光名所が存在するが、其の代表格に此処シャラシテイに存在する学修院、通称『マスタータワー』がある。

現在はメガシンカ発祥の地として知られている場所だが、元々『マスタータワー』と呼ばれる学修院は時のカロス王によってポケモンの研究機関として設立され、後に戦乱の世を生き残る為に築城学修院として改装された事によって今現在の姿となった。

そして此処シャラシテイは其の学修院を中心として発展してきた街であり、天高く聳え立つ巨塔は住民達の誇りと伝統として語り継がれている。

そんな街であるシャラシテイに辿り着いた少年は、今ポケモンジム前で最後の気合を入れをしていた。

格闘タイプのジムである此処シャラジムのジムリーダーは、彼の有名な『マスタータワー』の院長兼伝承者という大変凄い肩書を持つ女性だ。

どのポケモンジムも難関ではあったが、是迄のジム戦に比べ非常に厳しいポケモンバトルとなるのは間違い無い。

暫くすると少年は覚悟を決め、ポケモンジムの扉を開けて挑戦の一步を踏み出した。

くミアレシテイ く カロス大図書館 論文コーナー

ポケモンと呼ばれる生物は人間とは比べ物にならない程に強靱な肉体を持ち、身体能力と言う点では非常に秀でている生物だ。

彼等は電気を産み出したり熱光線を吐いたり、更には超能力を用いたりと超常的且つ摩訶不思議な存在として、時に神と拝まれ時に死神として恐れられる等、人間と共存してきた。

そんなポケモンと人類だが、ある日ポケモンと人類について大変興味深い一つの論文が発表された。

其の論文によるとポケモンの種類にもよるが、一番高い割合で人間とポケモンの遺伝子はなんと98.764%の割合で一致するのだという。

残りの1.236%が人類とポケモンの違いなのであり、人類とポケモンは過去に同

一の種から別れたものだ、と論文の研究者は結論付けている。

然し、かなり話題を呼んだ其の論文は発表された学会では無視された上に、後に研究者は禁忌の行為（ポケモンの改造等の生命冒流行為）をしたとして学会からの除名処分を受けている。

そして其の研究者はあるカントー地方のジムリーダーと親交があり、あるポケモンの制御に失敗して以降行方不明になったとされている。

そんな論文だが、カントー地方でのとある人物による事故から其の論文は見直される事になる…。

ムゲン団での執務を終えた少女はとある物を探しに、ミアレシティにあるカロス地方一の蔵書数を誇るカロス大図書館に来ていた。

そして今彼女が居るのは世界各地の研究論文が置かれたコーナーであり、少女には余り似つかない場所だ。

多少胡乱げな視線で見られても可笑しく無いが、周囲の人々はまるで彼女の存在など無いかの様に過ごしている。

暫くして少女は目的の物を見付けたのか、人物名順で『F』と書かれた本棚から出て来て、受付で其れを借りると軽やかな足取りで去って行く。

パソコンに記された少女の貸出履歴には、『ポケモンと人間の遺伝子構造』という題名の論文が載っていた。

第十一話

くシヤラジムく バトルコート

シヤラシテイに位置するポケモンジム、シヤラジムは格闘タイプを主としたポケモンジムである。

そのポケモンジムの内部は格闘タイプの育成要素である『心』、『技』、『体』の中で『技』と『体』が重視されているのか、チャレンジ内容はローラースケートを駆使しながらジム内を走行する特定数のジムトレーナーに勝利するジム内はローラースケート場となっているので走行方向は決まっている。走行するジムトレーナーを追いかけてタッチすると、バトルコートに移動してバトル出来る。勿論、事故防止の為逆走や待ち伏せは禁止。違反すれば失格になる。、というシンプルながらもチャレンジヤーの身体的素質を試すものとなっている。

そんなシヤラジムのチャレンジを持ち前の身体能力と器用さで突破し、そのテクニクを目にしたジムトレーナーからスケーターへならないかという熱心な勧誘を受けた少年は今、ジムリーダーにしてメガシンカ使いである女性の待つ場所に辿り着いた。

少年がバトルコートに近づいているのが見えたのか、ジムリーダーの女性は少年に向

けて手を振りながら早く来る様にと声をかける。

少年がその声に従って急いで彼女の所に向かうと、彼女は少年の瞳を暫し見つめ、その後何かを感じ取ったのかウンウンと言いながら満足気に頷いた。

ジムリーダーの女性の謎の領きに疑問を感じた少年だったが、少年が領きに対して質問する前に彼女は少年に話しかける。

「君には貴方のお父さん達に似た、良いトレーナーの素質を感じるわ!」

「そんな未来のチャンピオンである君への期待を込めて、この勝負…:全力で御相手します!!」

「命、爆発ポケモン技の爆発では無く、彼女なりの決意表明の科白である。!!」

そう少年に言ったジムリーダーの女性はこれからの勝負に興奮した様子を見せ、モンスターボールを持った手を少年に向けて突き出して宣言した。

女性の『期待』という言葉に緊張した少年だが、その緊張を察したのか、少年が腰に付けたモンスターボールが振動して存在を主張する。まるで、自分達を信じろと告げている様に。

ボールの震えに気付いた少年はその事に微かに微笑むと、気持ちを入れ替えるように頬を軽く叩いて、女性と同様にモンスターボールを持った手を突き出した。

そんな少年の目に強い闘志を見た女性は笑顔を浮かべると、両者はバトルコートのだ

位置に付き同時にポケモンを繰り出す。

少年にとって三つ目のバッジを賭けた戦いが、今始まる。

〈カロス国際空港〉 国際線到着口

カロス国際空港はミアレシティ近郊に位置するカロス地方において最大の空の玄関口であり、カロス地方での数少ない国際線を運行している空港である事から、多くの観光客やビジネスマンが日々此の場所を訪れている。

そして今、その空港にある人物達が訪れていた。

今日も数多くの飛行機が降り立ち、その飛行機から多くの人々が空港の出口を目指して歩いている空港内。

その群衆の中にいる二人、片や淡紫色の長髪をした何処かのタワーでタイクーンをしていそうな女性、片や黒髪のトレンチコートが似合うハンサムな男性が書類を見ながら会話している。

「最近多発している『カロス地方における首謀者不明事件』のカロスリーグとの共同捜査、ですか…。」

「うむ。首謀者の犯行目的は不明だが、此等の資料に載っている洗脳・暗示方法は過去の他地方の犯罪組織でよく見られた方法だ。」

「ええ…。その方法が使用されているという事は、過去の犯罪組織構成員が此等の犯行に関与している可能性が高いですね。」

二人の会話には多くの物騒な単語が出てきているが、会話を聴かれないように何か対策をしているのか、周囲の人々は何事も聞こえて無いかの様に歩いている。

やがて二人が空港の出口に差し掛った時、その二人組に声を掛ける、正確には男性の方へ話し掛ける人物がいた。

二人してその声の方へ振り返ると、少し髪がボサつき特殊スーツが似合いそうな黒髪の女性がニヤスパーを抱えながら走って来ていた。

声を掛けられたトレンチコートの男性は向かって来る黒髪の女性を目にすると、その鋭い目付きを和らげて嬉しそうにやれやれと眩き、男性の相方である薄紫色の髪の女性は相方から彼女の話を聞いていたのか、少し興味深げに彼女を見ていた。

二人がいる場所に着いた黒髪の女性は男性に対して真っ先に熱烈な抱擁をすると、男

性の胸元に顔を埋める。

相方がいる事を男性が黒髪の女性に伝えると、見られて恥ずかしいと思つたのか、彼女は直ぐに男性から離れると赤面しながら男性の相方の女性に向き直す。

男性と黒髪の女性の関係を知っている薄紫髪の女性はその行動に苦笑するも、直ぐに咳払いして真剣な表情になる。

「オホン…。改めまして、貴方がカロスリーグから派遣された捜査員でしょうか？」

「はい。貴方はカロスリーグからの要請で来られた国際警察の方ですね。カロスリーグを代表して感謝を申し上げます。」

薄紫髪の女性の真剣な表情を見た黒髪の女性も真面目な表情で質問に答えると、国際警察がリーグからの要請に応えてくれた事に対して御礼を言う。

その後、調査の話し合いをする為にカロスリーグ本部に向かったが、道中の雑談で両者はより良い関係を築く事に成功していた但し、薄紫髪の女性と黒髪の女性に挟まれたトレンチコートの男性は両者からの思い出話によって羞恥心が犠牲になつたが…。

くシヤラシテイ く マスタータワー内部

強さを追い求めるポケモントレーナーにとって自身のポケモンを強化する方法は幾つかあるが、その一つにメガシンカがある。

メガシンカ出来るポケモンの種類は限られているが、メガシンカしたポケモンは劇的な強さを誇り、メガシンカ前の同じポケモンと比べると一線を画す能力を発揮する。

然しその条件は厳しく、キーストーンとメガストーンを揃える事は勿論の事、トレーナーからポケモンへの想いとポケモンからトレーナーへの想いが大きければ、つまりはトレーナーとポケモンとの絆が以心伝心レベルで深くなければメガシンカ出来無いという不思議な現象だ。

そんなメガシンカの伝承を受け継ぎ、その真実を探求する場所であり、象徴的である巨大なメガルカリオの石像が聳え立っているマスタータワーのエントランスホールに少年は来ていた。

何故少年がこの様な場所にいるのかについては、ジム戦があった一日程前に戻る必要がある。

格闘タイプのジムであるシャラジムのジムリーダーの女性を倒し、少年は見事に三つ目のバッジであるファイトバッジを手に入れる事が出来た。

少年との熱きバトルを終えたばかりで興奮しているジムリーダーの女性は少年を讃えた後に、私の目に狂いは無かったと言うと彼女は少年をマスタータワーに招待したいと言いつ出した。

マスタータワーといえどトレーナーで知らぬ者もない研究兼教育機関であり、目の前の女性が院長を務める由緒正しき名門校である。又、メガシンカ発祥の地である事から『継承者』と呼ばれる歴代のメガシンカ使いがおり、其処に招待される事はポケモントレーナーとしても非常に稀有な機会である。

女性からの突然の誘いに少年が戸惑っていると、彼女は少年に招待状代わりのエムブレムと許可証と書かれた紙を手渡してバトルコートから去って行く。

余りにも突然の事に茫然としていた少年だったが、我に戻ると同時にエムブレムが目に入る。そのエムブレムには盾が彫られており、盾の中はフラージュエスが三体並んだ上部にシエルダーが多数書かれた下部というデザインになっている。

そんな思わぬ出来事と貰い物を受け取った少年は飽和状態の頭を整理する為に、一度ポケモンセンターに戻る事にした。

ポケモンセンターの寝室で情報を整理し、ジム戦の疲れを癒やした次の日、少年はマ

スタータワーに訪れて今に至る。

途中、少年が招待状の案内通りにマスタータワーに入ろうとした時に守衛に止められるという多少のゴタゴタがあったが、ポケモンバトルの実力と受け取ったエムブレム、許可証を見せた事で解決した。

その後少年が案内されたエントランスホールでジムリーダーの女性を待っていると、暫くしてその女性が現れた。

そんな彼女は普段のジムリーダーとしての服装では無く、伝統ある『継承者』としての服装、具体的には歴史を感じる装飾された紺色のローブに透輝石の留め具、そしてキーストーンが嵌め込まれたグローブをしている。

継承者の女性は少年を待たせた事等の謝罪もそこに本題に入り、少年をマスタータワーに呼んだ理由と要望を話し始める。

彼女の5分程の説明を纏めると、ジム戦で少年の才能と精神を感じた彼女は少年にメガシンカに必要なキーストーンを託したいので、キーストーン獲得の試練としてマスタータワーの大階段にいるトレーナー達を乗り越えてタワー最上階のテラスに迄来てほしい、とのことらしい。

説明を終えた彼女は少年に激励をして大階段を駆け上がって行き、やがて見えなくなつた。

伝承者が待つ最上階辺りを少年が見上げてみると、塔の余りの高さからか最上階迄続く大階段とメガルカリ才像の頭部が非常に小さく見える。

その遠さがまるで自分の目標の様に思えた少年だったが、弱気になった心を追い払うかの様に頬を叩いて気持ちを入れ直す。

チャンピオンになるという自身の目標の為に、少年は伝承者からの試練へ足を踏み出した。

くミアレシテイ く 『博士』 邸

ミアレシテイ郊外にはある人物の邸宅が存在し、その邸宅の周囲はまるで内部を見られたくないかの様な高い樹木と煉瓦壁で囲まれている。

その邸宅の家主とはある高名な研究者だった人物で、引退してからも何かしらの研究をしているらしい。

以前はよく外出していたらしいが、ある日を境にその姿を見る事は稀になったとか。

少年がマスタータワーで試練を受けていた頃、その邸宅には喪服姿の少女が訪れてい

た。

普通ならば人目を惹くような異質な格好をしている少女はさも当然の様に邸宅に入っていくが、近所の住人や出歩いている人々はそれを気にする仕草すら見せない。

少女が邸宅の扉をノックすると、暫くして中から初老の男性が出て来た。

訪れた人物が少女だと気付いた男性は落ち着きを無くし、少女に向けて只ひたすらに何かの言葉を使い続ける。

そんな男性を呆れた眼で見ると、少女は男性の頭に触れて『落ち着け』と命令する。すると、少女の指先から何かの波動が流れ、その波動を受けた男性は少し虚ろな目をした後に意思の光が少しずつ戻って来た。

正気に戻った男性だったが少女からの視線に気付くと慌てて少女を中に案内し、何事もなかったかの様に玄関の扉が閉まった。

中に入った後、少女と男性は居間で向かい合って座っていた。

間の机には珈琲が入ったカップやお茶菓子が置かれているが互いに手に取る様子無く、男性は落ち着きを見せたと言っても緊張気味で、少女は只無言で何かを見ていた。

此の場の余りの空気に男性が少女に用件を尋ねようとした時、突然少女が鞆からある物を取り出し男性に質問した。

「貴方、此れが何か解るかしら？」

少女が鞆から取り出したのは、あのフレア団秘密基地跡で回収したボンヤリと光る結晶だった。

第十二話

「マスタータワー」 最上階 テラス前

マスタータワーの大階段を途中のトレーナー達を破りながら駆け上がり、少年は大階段の行き止まりにある大きな扉の前に辿り着いた。

少年が何かの強い波動らしきモノを感じるの、恐らくこの先で彼女は待っているのだろう。

波動で乱れた精神を落ち着かせる為に一度深呼吸すると、少年は意を決して大扉を開いた。

扉を開けた先にはシヤラシテイ一带を見渡せる広大なテラスがあり、少年の予想道理その中央には左右にルカリオを従えた伝承者の女性が少年に背を向けて佇んでいた。

少年が無事この場所に辿り着いた事に気付き、女性は笑みを浮かべながら少年の方へ振り返る。

そのまま少年が女性のいる場所に近づくと、女性の側にいた一体のルカリオが少年を見定める様な視線を向けている事に気付いた。

そして少年が女性の前に着いて彼女が少年話し掛けようとした瞬間、少年を見詰めていたルカリオが鳴き声を上げて女性の前に飛び出て来た。

急に出て来たルカリオに何事かと思つた少年だったが、目の前の女性は一瞬驚いた顔をするも直ぐに真面目な表情になつた。

その後も暫し見詰め合つた女性とルカリオだが、女性はルカリオに質問する。

「貴方も、彼と共に戦つてみたいと言ふの？」

そんな女性からの質問を肯定するかの様に、ルカリオは女性を見詰めたまま鳴き声を上げる。

ルカリオの返答を受けた女性は一度頷いた後に少し懐かしむ様な目を見ると、改めて少年に話し掛ける。

「ルカリオは貴方の事が気に入つたみたい。∴貴方は父親だけでなく、彼女にも似ているようね。」

そう言うと、女性は何処からか『メガリング』を取り出して少年に手渡し、もう一体のルカリオを傍に控えさせる。

「メガリングは代々の伝承者が此処で渡す決まりになつているの。」

「本当なら渡すだけなんだけど∴。」

そこで女性は言葉を切り、少年の目を改めて見た。女性の目は何かを懐かしみ、見詰

める瞳には少年を見ているようで別の誰かを映している様にも思えた。

そんな万感の一時が過ぎ、女性は少年に先程思いついた考えを話す。

「そのルカリオにも『ルカリオナイト』を持たせているから、メガシンカバトルをしましよう！」

「この戦いが、貴方の結末を彼女の様に輝かしい物にしてくれる事を願って…。」

そう言ううと女性は少年と距離を取り、バトルするのに十分な距離になるとルカリオの前に出して宣言する。

「貴方も、チャンピオンを目指す一人のポケモントレーナーならば…。」

「少年もこの勝負、彼女の様に軽く乗り越えてみなさい！」

そして女性がメガリングに手を翳すと、彼女のルカリオの装備しているルカリオナイトが共鳴して神秘的な輝きを放ち、何処からか突然の突風が吹き荒れる。

メガシンカによる突然の眩しさと突風に、思わず少年は目を瞑ってしまう。

そして少年が再び目を開けると、其処にはこれまでに感じた事の無い程の強い気迫を放つルカリオの姿があった。

先程迄全くと言っていいほどしなかった雰囲気を感じさせるルカリオに少年は思わずその場でたじろいでしまうが、何時の間にか隣にいたもう片方のルカリオが少年の前

に進み出る。

ルカリオはそのままバトル開始の位置に着くと、少年を闘争心漲る目で一瞥して再び前を向き、女性のルカリオに対面する。

少年がそんなルカリオの思いに気付いた時、先程貫ったばかりのメガリングが唐突に光だした。よく見ると少年と共に戦うルカリオが身に着けているメガストーンも同様の光を放っている。

ルカリオの勝利への想いと少年のトレーナーとしての覚悟が重なり合い、先程のメガストーン以上の輝きを放つメガリングへと少年は手を翳し、天高く腕を掲げて毅然とした態度で前を見据える。

少年が手を掲げると同時に、ルカリオは遙か遠くにまで響く様な咆哮を上げ、メガストーンから溢れる輝きがルカリオの全身を覆い尽くす。

斯くして互いにメガルカリオが出揃い、ルカリオと少年の想いを賭けた最後の試練が始まった…。

くミアレシテイ く 『博士』邸

少女が取り出した光る不思議な結晶―目の前で椅子に座る少女曰く『遺伝子結晶』と
言う物らしいが―を研究者らしく丁寧且つ慎重に拝見する男性。

その後も結晶を軽く叩いたり光に透かしたりして暫く弄っていた男性だったが、まる
で見当がつかないのか少し悔しそうにしながら少女に返却する。

「残念ながら、僕には見当がつかないよ。強いて言えば、ヒヤツコクの日時計やメガス
トーンに近いのかな？」

「あら、流石『博士』ね。悪くない線よ。」

結晶に対する博士からの指摘に、少女はそう言つて今まで手を付けなかつた珈琲に手
を付ける。

その後二人して飲み物や茶菓子を嗜んで一度思考を整えた男性に、少女は鞆から複数
のファイルを男性に差し出す。

比較的分厚い複数のファイルを受け取つた男性だが、男性がそれを確認する前に少女
は立ち上がつて部屋から立ち去ろうとする。

そして少女が部屋から去る直前、少女は男性にある命令を下した。

『博士』、一度しか言わないわ。」

先程の資料を調べようとする男性に、少女は背を向けたままそう話し掛ける。一度しか言わない、という少女の強い言葉に思わず手を止めて聞き入る男性。

「余計な詮索は要らないし、裏切りは絶対に赦さない。」

そう言つて少女は、研究者と善人氣質の抜けない男性に虚無の視線を向ける。

その瞳に以前のトラウマが蘇つた男性は壊れた玩具の様にガクガクと頷き、少女も男性の様子を見て満足気な表情を浮かべた。

「貴方は唯、その結晶の使用法だけを考えなさい。」

そう言い残すと少女は男性がいる部屋から立ち去り、少しすると玄関の扉が開いて閉じた音がした。

後に残された男性が恐る恐る少女から渡されたファイルを見てみると、半分程が『赤い鎖』や『遺伝子の楔』、更には『ウツロイド』や『輝き様』、『ムゲンダイナ』という単語が書かれている何処からか入手してきたらしい研究資料。

そしてもう半分がフレア団でのメガシンカの研究データ、及びその過程で生まれた『遺伝子結晶』について纏められた物だった。

くマスタートワーく テラス

多くの人々がTVの中でしか見た事の無かったメガシンカポケモン同士の激しい戦いの結果は、最後の最後で幸運の天秤が少年に僅かに傾いた事で少年の勝利に終わった。

少年も女性も疲労困憊で膨大な汗を流しているが、メガシンカの時間制限もある為にそれ程長時間戦っていた訳では無い。

然しポケモンバトルというのは一瞬の判断が勝敗に関わる物であり、優秀なポケモントレーナーは『ゾーン』——所謂、覚醒状態という感覚——に入る事で短時間により多くの判断を下すのだ。

この能力がトレーナーとしての素質に優劣を付け、自然界ならば敵わない様な相手と相対しても、自らのポケモンの能力を文字通り全て発揮して勝利出来る。

そんな高度な状態ですつとバトルしていたのだから、三十分程度のバトルを二時間や三時間に感じてても可笑しくは無い。

寧ろ月日的にはまだ新人とも呼べる少年には天性の才能があり、カロス地方でトップクラスの實力を誇る女性の腕前に既に辿りつつある点においては、リーグ挑戦者として

歴代最高の素質があると言える。

少年が久々の逸材―それも少年の父親も含まれる『カロスの英雄』並の素質―であった事を女性は我が事のように喜び、勝負に負けた悔しさよりも白熱した勝負の興奮の残滓の方が大きいのか、バトルの最後に見えた彼女のルカリオと同様に大変満足そうな表情をしている。

そうして暫く風が吹き抜ける冷たいテラスの床に倒れ込んだ二人だったが、流石格闘タイプのジムリーダーと言うべきか、少年よりも早く復帰した女性は彼に手を貸して立ち上がらせる。

暫しの休息で少しだけ息が整った少年は女性の助けを借りて立ち上がり、手を貸してくれた御礼を言う。

律儀で純粹な少年に女性は思わず笑みを溢し、優しく少年に話し掛ける。

「少年。貴方はきつと、貴方のお父さん以上に強くなれるわ。」

「あの『英雄』である彼女の様に、貴方の旅は輝かしい物になるでしょう。」

私が保証する、と女性は最後に言つて、まだ成長途中である少年の肩に手を乗せる。

確かに少年の父親も「息子は天才だ！」等と祖父母等に吹聴していたが、目の前の女性の様な実力者からそう言われると、少年は恥ずかしい様な誇らしい様な複雑な気持ち

になった。

急に父親の本音を知りたくなった少年だが、そんな事を考えていると女性が少年の肩を揺さぶって呼び掛けている事に気付いた。

女性からの呼び掛けに少年が返事をする、女性は「そろそろ帰らないの？」と少年に問い掛ける。

そう言われて少年が辺りを見渡して見ると、広大な空と海が茜色に染まり始め、豆粒の様な大きさの家々の灯りが目立つ様な時間になっていた。

時間を教えてくれた女性に感謝の言葉を言うと、今日の宿を得る為に少年は急いでポケモンセンターに駆けて行った。

そんな少年のそそっかしい後ろ姿に、女性は苦笑しながら手を振って見送る。

その見送る時に見た少年の後ろ姿は、女性にとって忘れられない少女の姿が重なっている気がした。

世界中のポケモンリーグでは、リーグ開催期間中の挑戦者の安全を最大限確保する事が求められている。

当然と言えば当然だが、挑戦者の安全確保は多くの地方のポケモンリーグにとって悩みの種となっている。

その様な理由としていくつがあるが、代表的なのを上げると…。

第一に、予算の問題。

ポケモンリーグの運営費の大半は地方税収の予算から出ている。人口が多い地方ならばそれだけ多くの予算が降り、安全管理費に多額の予算を懸けれるが人口が少ない地方ではそうはいかない。

そのような地方ではスポンサーを募って予算を獲得しようとするが、一時期の地方では余りに企業広告が多く、市民から景観が悪くなる等の多くの批判を食らったのだ。

その為、どの地方も以前より地方からの予算が増えた過去があるのだが、それでも十分な額とは言えない。

第二に、人員の問題。

リーグ開催中の安全性を高くする為に、地方警察機関やポケモンレンジャーの他に多くの警備員か監視員をポケモンリーグは雇用しているが、正直に言うとな人員は常に不足気味だ。

というのも、警備員や監視官にはある程度のポケモンバトルの実績——具体的には一方のバッジを四つ程保有している事——が求められており、そこから更に人格や犯罪歴等を鑑みて雇用されている。

そしてそれ等の条件を満たしている大半の人物は挑戦者として出場する為、更に多くの人員を必要とする……と言う負の連鎖が起きているのが現状だ。

第三に、自然災害や野生ポケモンの行動。

挑戦者が通る道路は一年を通して比較的变化が少なく、野生ポケモンもそこまで凶暴では無い道路が選ばれている。

然しながら、ポケモンの大量発生や突然の自然災害等があると生態系が一時的変化する現象が毎年の様に起きている。

特にイツシュ地方ではそれが顕著であり、イツシュリーグの自然対策課は何処よりもブラック、いや、最早それを通り越してダークな職場だと職員に噂されている。

この様にリーグ開催期間中のポケモンリーグは非常に忙しく、自然環境に呼応する様に人為的な問題も多数発生する。

特に今年のカロスリーグはその問題発生数が例年と比べ段違いになっていた…。

「…はい、はい。えっ?!ミアレシティで不良同士のポケモンバトル?しかも町中で破壊光線や地震を連発!」

「はい、こちらカロスリーグ安全対策室です。はい…七番道路で『ホイーガズ』と名乗る暴走族が爆走中ですか…。」

「十三番道路の監視員より報告!ナツクラとフカマルの群れが抗争中!えっ…?…今、更に群れのボスであるフライゴンとガブリアス迄もが参入する騒動へと発展した模様!!」

「ヒヤッコクシティで起きた人類至上主義者人類だけが地上で繁栄すべきであるという思想を抱く人々の事。ポケモンとは共存では無く奴隷の様に扱うべきという主張している。のデモは急いで警察に連絡しろ!このままだとポケモン保護団体ポケモンは家族であるという考えの元活動している団体。偶にプラでズマな宗教団体の過激派の影響を受けて「人類はポケモンと別れる必要がある!」と言って他人にポケモンを捨てさせる人もいる。と衝突するぞ!!」

そんな阿鼻叫喚の報告を聞くチャンピオンは、現場を駆け回りながらある種の確信に

近い物を感じていた。

何かの災厄、それも二十五年前のフレア団の様な特大の陰謀が始まろうとしている、
という…。